印度新抒情詩集

丁園

ルゴアタ・トアナラドンビラ

增野三良譯

並挿繪裝幀

1915

東京東雲堂出版

園丁

印度新抒情詩集

タゴール著

增野三良譯

東京

叢文閣

集詩情抒新度印

丁園

著ルゴアタ・トアナラドンビラ

序客歌々浩田角

譯良三野増

繪挿幀裝及

東京東雲堂書店出版

THE GARDENER

BY

RABINDRANATH TAGORE

DONE INTO JAPANESE FROM
THE AUTHOR'S ENGLISH VERSION

BY

SABURŌ MASHINO

TOWUNDŌ: TOKYO

1915

著者緒言

ベンゴル語から英譯せられて、この書のうちに上梓せられたこれらの戀愛と生との抒情詩の多くは、「ギタンヂャリ」に蒐められた信仰的詩篇よりも遙か以前にものせられた作である。厥の英散文譯はあながち逐字ではなく、寧ろ原詩は屢々省略せられ且つ屢々義解せられてゐるのである。

ラビンドラナアト・タアゴル識

毒蛇の謎

（増野君の新著に序す）

□増野君、曾て外道の詩を語り、オスカーワイルドを説きたる頃、コブラを愛すとて、得意の毒蛇のペン書を寄せられた、予は之に復書して『三良子、印度のコブラを愛する甚だ妙、然しポプラー（凡俗）を合せ愛せよ、コブラとポプラーと音相近し、「コ」の奇に比して「ポ」の俗なるのみ、人はよろしく「俗」を

支配して後「奇」に臨むべし、君また少しく「俗」の「毒」を飲んで見たまへ、此「毒」とは俗化することなり』と記したことがある。

□當時増野君は、毒蛇コブラの「奇」に赴いて、ポプラーの「俗」を排し、恐らくはボデーの建築を破壊せんかと思はれた、予は人生がボデーを家とする限り、徒に之を破壊するの無意味なるを信ずるが故に、一寸之に楔子をさしたつもりて、コブラをポプラーに通はせたのである、それも何時か忘れて

居た昨今、増野君は當時の事を記して、その新譯タゴールの「園丁」に序として、「毒蛇の辨」を書けよといふ、予は、一時の楔子として打込んだ所見を、此に如何に辨ずべきか。

□増野君は、當時オスカーワイルドの弟子らしく予には見えた、その「ワイルド」が、ボデーの破壊された自分の家の殘礫を冷笑するまでに至らずに、轉地してタゴールといふ建築師を倩ひ、熱心にその家を造り、しかもその方法をわが思想界に普及

せんとするに至つたのは、心機一轉か、抑もまた一度コブラの毒を味つたからであらうか、或はタゴールといふ新しいポプラーの毒に依て、コブラの毒を除かれた爲であらう。

□毒を以て毒を制するの意義を實現したのは增野君の思想の轉化である、之を稱して「どくとる」の眞義といふか、輕口といふ莫れ、地口と見る莫れ、此ゴシップに見ゆる緣語は、究竟また「眞理の象徵」にして、「人生の謎」を解くに妙なるを、予は信じて

居る。

□「佛を罵り祖を詈る」といふ語あり、增野君の佛は祖は、ワイルドか、タゴールか、その孰れにしても、ワイルドを罵り、タゴールを詈り得るの境地にあらんとす、之を罵り得て、人生はまさに纔に獨地の生面を拓く。

□「才人は世を經し、能人は世を取り、曉人は世に逢ひ、名人は世に垂る、高人は世を出づ、達人は世を弄す、寧ろ世に隨ふの庸愚とならんとも、世

を欺くの豪傑となる無からんの語あり。増野君は、才か、能か、曉か、名か、高か、達か、はた庸愚を欲するか、豪傑を望むか。

□「世に隨ふの庸愚」たらんことは、「世を欺くの豪傑」たらんよりは、實は艱しい、夫の所謂天才は、皆世を欺く豪傑に似て居る、世を欺くといふよりは、先づ自から欺くのである、「自から欺く」とは、自から揣からず、自から覺らざるを謂ふ、揣からず覺らずして、竟に世を欺く豪傑たるも、面白からざ

るに非ず、然し眞に「世に隨ふの庸愚」たるに比して如何。

□此に所謂「庸愚」此に所謂「豪傑」の意味を、増野君は、解し得て居ると思ふ、予は、増野君に對して、タゴールより「庸愚」の洗禮を受けたるを信ぜんと欲し、「毒蛇の辨」といふよりは、寧ろ「毒蛇の謎」を記して、序に代ふ。

大正四年九月

本郷西片町不二山房にて

浩々歌客

裝幀の解

ターヂ・マハアルの象徴によりて……表紙

園丁目次

どうぞ御容赦を願ひます、女王陛下……1
嗟吁、詩人よ、夕暮が近づいた……7
曉に私は網を海に打ちました……11
あゝ私のために、何故彼等は私の家を……14
私は落着いてゐません……19
馴れた小鳥は籠のなかに居ました……22
おゝ母様、若い王子か吾家の戸口をお通りになります……26
私が夜ひとりで嬶曳にゆく折に……30
寢床の傍の燈が消えたときに……32
その儘お前の仕事をしておいで、花嫁よ……36

それなりでおいで、お化粧にひまをおつぶしでない……40
若しお前が忙しいのに水甕に汲まうと思ふなら、おらび……44
私は何も尋ねなかつた……49
私は路を歩いて居た……52
私は森の下闇を走る麝香鹿のやうに走る……56
手は手に凭りかゝり眼は眼にためらはせて……58
黄色な小鳥が樹の間で啼いてゐて……62
二人の姉妹が水を汲みにきた折に……66
お前は川沿ひの道を……69
毎日毎日彼は來たり往つたりする……71
何故彼は私の戸口へ來るつもりになつたのか……73
あの女が急ぎ足で私とすれ違つたときに……75
什うしてお前は其處へ座つてお前の腕環を……77

君の胸の秘密を包んでゐたまふな、友よ……80
私達に來れ、青年よ、私達に眞實を告げよ……82
私は汝の同意の手から生れたものを握つてゐる……85
縱令如何樣に悲愁を齎しても愛を信じなさい……88
お前の疑問の眼つきは傷ましい……91
妾に話して下さい戀人よ……95
お前は私の夢の蒼穹をたゞよふ夕雲である……97
私のこゝろその曠野の小鳥は……100
妾に知らして頂戴全く眞實なの、戀人よ……102
私はお前を愛する戀びとよ……105
私の許もまたないで行つてはなりません戀人よ……108
私があまり易々とお前を理會んでしまはぬやうに……110
彼は囁いた『戀人よ、お前の眼をおあげ』……113

おまへは新しい花の花環を私の頸にかけやうと思ふの、美しいひとよ？……116
わが戀人よ、昔々そなたの詩人が彼の心のなかで一大抒事詩を進水した……119
わたしは朝ぢうかゝつて花環を編まうとして居るのに……121
疑惑の微笑がお前の眸に飄搖いてゐる……124
わたしがお前にうちあけねばならぬ臭底の言葉を云はうと欲かのに……127
おゝ狂人よ、豪壯に酔ばらつた狂人よ……132
否わが友よ、わたしは決して隱遁者にはなるまい……137
尊者よ、この二人の罪人を赦せよ……139
行かねばならぬ旅客には神の速力を命ぜよ……142
おまへはわたしを殘して、おまへの道を辿つて行つた……144
若しお前が歇めてほしいと思ふなら、私は唄をやめやう……148
お前の溫柔い縲紲から私を解いてくれ、戀人よ……150
私は彼の女の手を把つて、私の胸に彼の女を葬と抱いてゐる……152

戀人よ私の情はお前に邂逅ふやうに晝も夜もあこがれてゐる……154
それでは最後の唄をうたふてしまつて私達は別れやう……156
何故燈火が消えたか……158
何故お前は私を侮辱する顏色をするのだ……160
お前は籠を提げて何處へ急いでゆくのだ……164
あなたが往つたのは眞晝であつた……166
妾は夥多の女の群のなかの一人であつたのです……169
私はお前の花を摘んでとつた、おゝ現世よ……172
或る朝花畑のなかに盲目の娘が……174
おゝ女よ、お前はたゞ神の手細工であるばかりでなくて……176
生の猛進と咆哮のたゞなかで……178
靜かに、戀人よ離別の時を佳快くしやう……180
夢の薄暗い小徑のなかで私は……182

旅人よ、汝は行かねばならぬか……185
私は私の一日を道路の焦げつく熱い埃塵のなかで過した……189
またお前は招んでゐるのか……192
放浪して居る狂人が試金石を索してゐた……195
縱令夕暮が徐々歩いて來て……196
誰一人も永劫には生きない、兄弟よ……203
わしは金の牡鹿を獵りたてゝゐる……208
わしは子供の時の或る日のことを想ひうかべる……210
日はまだ暮れない、市はまだすまない……213
苛酷い勞苦の幾日かを經て私は寺を建立した……218
無限の富は汝のものではない……222
世界の會堂では……225
晝夜中に似面非隱遁者が告げた……227

市が寺の門前で開かれてゐた……230
西方の國から來た職工とその妻が……232
五月であつた……235
私は屢々驚異んだ、何處に……237
お前の眼の一瞥でお前は……239
何故汝は其麼にかすかに私に耳に私語くのだ……241
私たちは今夜死の遊戯をしてゐる……244
彼の女は丘邊に棲んでゐた……248
綠と黃色の稻の野面を越えて……253
お前は誰だ、讀者よ、私の詩を……255

目次終

挿繪目次

無憂樹下の舞妓……扉 *to face page*
その儘仕事をしておいで花嫁よ……二
白屋内の媾曳……六〇
—Muhammad Fakirullah khan を摸す—
呪　術……一〇八
アヂャンターの壁畫から……一六六
今戸精司氏作譯者胸像……二〇四

どうぞ御容赦を願ひます、女王陛下

HAVE MERCY UPON YOUR SERVAT, MY QUEEN!

侍臣　どうぞ御容赦を願ひます、女王陛下。

女王　會議が濟んで侍臣達は皆退出したのに、何故汝は是麼に遲く來たのぢや。

侍臣

他の侍臣達の役目が濟んでしまつた時分が、私の參る時刻でございます。

私は最後の侍臣の役目として何が殘つて居りますかお伺ひに參つたのでございます。

女王

遲すぎるのに何をしやうといふのぢや。

侍臣

何卒私を花園の園丁になさつて下さいますやう。

女王

、それはほんに呆事てはないかえ。

侍臣

私は他のつとめは止めたうございます。

私は劍も槍も塵埃のなかへ拋棄ります。どうぞ私を遠國の宮廷へお遣しにならぬやうに、また新しく捷利を贏ちえることを御命令にならぬやうに希ひます。併し何卒私を花園の園丁になさつて下さいますやう。

女王

汝は園丁になつて何を務めやうと思ふの。

侍臣

陛下の閑散の日々の奉仕てございます。

私は朝陛下がお歩きになる草深い逕をいつも新鮮くいたしませう。其處では玉足が一歩毎に、死を憧れてゐる花々によつて歡呼の聲をもつて迎へられるでございませう。

私は陛下をサプタバルナの樹枝のなかの鞦韆でゆすぶり申しませう。其處では早めにのぼる夕月が、青葉を拔けて陛下の裳裾を接吻しやうと焦燥るでございませう。私は陛下の御寢所を照らす燈盞を芳香油で一杯に注ぎませう。そしてまた陛下の脚椅を檀香と咱夫藍とで不思議な圖案を貼りつけて飾りませう。

女王　その褒美には何を遣つたらよからうねえ。

侍臣　御意に叶ふならば、陛下の柔かい蓮華の蕾のやうな纖細な拳をお把り申して、花の鍵索をお手頸に通すことをお許し下さいますやう。また無憂樹の蕾の赤い汁で陛下のみ蹠を染めさせて下さいますやう、もしやひよつと塵埃の飛びがその上に落ちたなら口吻けて拭ひとらせて下さいませ。

女王

汝の祈願は許してやりませう、喃、汝は花園の園丁になつたのぢや。

嗟吁、詩人よ、夕暮が近づいた

AH, POET, THE EVENING DRAWS NEAR;

嗟吁、詩人よ、夕暮が近づいた。君が髪は灰色に變らうとして居る。

君は獨り寂しい瞑想のうちに未來の音信を聞くのであらうか。

『日が暮れた、』詩人が云ふ、『彼方の村から、よしや遲くならうとも誰かゞ來る筈だと、私は耳を澄して居る。

『若い彷徨の情が不圖邂逅ふて、燃ゆる眼の二對が、彼等

の沈默を破り相語りあふために音樂を乞ひはせぬかと
私は見守つて居る。
『私が若しも生命の岸に座つて居ながら死と彼岸とに思耽
つたならば、誰か彼等の情熱の歌を織るものがあるて
あらう？
『暮方早く星は隱れた。
『茶毘の薪の火の手は、次第に、默した川岸に消えてしま
つた。
『豺の群は、疲れきつた月の光をあびた廢屋の庭から一齊
に吼えて居る。

『若しも家を棄てた放浪者が夜を見守らうと此處に來て、
頭を垂れて暗闇のさゝやきに耳を澄ますときに、厥の
時私が戸をとざしてゐて、人間の結縛から自分を脫け
やうとしてゐたとしたならば、誰か彼の耳に生の秘密
を呟くものがあらう？
『私の髮が灰色に化つても取るに足らぬことである。
『私はこの村落の一番若い者と同樣に若く、また一番年老
つた者と同樣に老年である。
『或者には優柔しく素朴な微笑があり、また或者にはその
眼に狡猾な閃きがある。

『或者には白晝に湧き上る涙がある。また或者には暗夜に隱された涙がある。

『彼等は皆私に用がある、それだから私は未來の思ひに耽つてゐる暇がない。

『私の齡は各人の齡に通じてゐる。私の髮が灰色に化つても何であらう？』

曉に私は網を海に打ちました

IN THE MORNING I CAST MY NET INTO THE SEA.

曉に私は網を海に打ちました。

私は暗い深淵から奇異な形の奇異な美しい物を引きあげました――或者は微笑の如く輝いて居ります、或者は涙の如くキラキラして居ります、又或者は花嫁の頰のやうに紅を潮して居ります。

私が一日の重荷を背負ふて家に歸つたときに、戀人は庭に座つて懈怠げに花瓣を毟つて居ました。

私は一寸躊躇してから、私が引きあげた皆を彼の女の足もとに置いて、默つたまゝ立つて居ました。

彼の女は一瞥て申しました、『何といふ奇體なものでせう？　私は何の用にたつものか知りません。』

私は羞恥に頭を垂れて考へました、『私は是等のために苦闘してゐたのではない。また私はそれを市場で買ふたでもない。それは彼の女への贈物としてふさはしくないのだ。』

それから終夜私は街のなかに一つ一つ抛棄つてしまひました。

曉(あけがた)に旅人達がやつて來ました。彼等はそれを拾ひあげて
遠い國々へ運んでゆきました。

あゝ私のために、なぜ彼等は私の家を

AH ME, WHY DID THEY BUILD MY HOUSE

あゝ私のために、なぜ彼等は私の家を市場の町にゆく路傍に建てたのだらう。

彼等は樹立の側に荷足船を繋ひます。

彼等は氣隨氣儘に、來たり、行つたり、さ迷ふたりして居ます。

私は座つて彼等を見守つて居ます。私の時劫は不精にすぎてゆきます。

私は彼等を見ぬふりはできません。而して斯うして私の日々が過ぎてゆくのです。

夜も晝も彼等の跫音が戸の側に響いてゐます。

私は無駄に叫びます、『私は汝を知らないのだ。』

彼等の或者が私の指に知られて居ります。或者は私の鼻孔に知られて居ります。私の血管の血は彼等を知つてゐる樣子です。そして或者は私の夢に知られて居ります。

私は彼等を見ぬふりはできません。私は彼等を呼びかけ

て云ひます、誰でもかまはぬから吾家に來て貰いたい。
さうです、來て貰いたい。』

曉に鐘が寺で鳴ります。
彼等は手に籠をさげて來ます。
彼等の足は薔薇色の紅味を帶びて居ます。曙の若々しい
光が彼等の顏を照して居ます。
私は彼等を見ぬふりはできません。私は彼等を呼びかけ
て云ひます、『吾家の庭園に來て花を聚めて貰いたい。
此處へ來て貰いたい。』

正午になると銅鑼が宮城の門で鳴ります。
私は何故彼等が仕事を捨てゝ吾家の籬の側をうろつくの
か知りません。
花々は彼等の髮に色褪せて凋んでしまひます。音律は彼
等の笛のなかに倦み疲れて居ります。
私は彼等を見ぬふりはできません。私は彼等を呼びかけ
て云ひます、『吾家の樹の下に涼しい蔭があります、お
いで、わが友よ。』

夜になると蟋蟀が森のなかですだきます。
徐々と吾家の戸口に來て靜かに叩く者は誰であらう？
私は漠然と顏を見たが、一言葉も変されません、空の寂闃はあたりをすつかりとり圍んで居ます。
私は私の沈默の客人を見ぬふりはできません。私は暗闇をすかしてその顏を凝視めて居ります。夢幻の時劫が通り過ぎてゆきます。

私は落着いてゐません

I AM RESTLESS.

私は落着いてゐません。私は遠方のものを渇望して居ます。
私の心靈は朦朧な遠方の裳裾に觸らうと思つて憧憬のなかへ出立しました。
おゝ「偉大な彼方」よ、おゝ爾の笛のするどい招喚よ！
私は忘れてゐる、いつも私は忘れてゐる、私には飛ぶ翅のないことを、またいつまでもこの一箇所に縛られて

ねることを。

私は熱烈に一睡もしません、私は不思議な國の旅の者です。

爾の呼吸は私を訪れて不可能の希望を私語きます。

爾の言語は私の情に情自身の言語のやうによくわかります。

おゝ「探求ねる遠方」よ、おゝ爾の笛のするどき招喚よ！

私は忘れて居る、いつも私は忘れて居る、私が道を知らぬことを、また私が翼の生えた馬を持つてゐないことを。

私は茫然してゐます、私は自分の情のなかの流離者です。

懈怠い時の太陽がカンカン照りつける霧氣のなかに、何と爾の廣大無邊な幻影が空の青みのなかに象を表はすことであらう！

おゝ「一番遠方の極所」よ、おゝ爾の笛のするどい招喚よ！

私は忘れてゐる、いつも私は忘れてゐる、私が孤獨で住む家では門は何處もみな鎖されてあることを！

馴れた小鳥は籠のなかに居ました

THE TAME BIRD WAS IN A CAGE,

馴れた小鳥は籠のなかに居ました、自由な小鳥は森の中に居ました。

時節が到來して彼等は邂逅ひました、それは宿命の命令であつたのです。

自由な小鳥が叫んだ、『おゝわが戀人よ、私達は森へゆかうぢやないか。』

籠の小鳥が囁いた、『此處へおいて、私達は籠のなかで暮

さうぢやありませんか。』

自由な小鳥が云ひました、『格子のなかでは、一人が翼を擴げる場所もないではないか？』

籠の小鳥が叫びました、『哀哉、私は大空の何處へ棲止つてよいか知つて居ません。』

自由な小鳥が叫びました、『愛人よ、森林の唱歌をうたつて御覽。』

籠の小鳥が答へました、『私の側にお座り、私は學者の言語を教へてあげませう。』

森の小鳥が叫びました。『いやさうではない、唱歌といふ

ものは教へられるものではない。』

籠の小鳥が答へました、『私が森林の唱歌を知つて居ないのはかなしいことです。』

彼等の戀は憧憬で燃えて居ます、しかし彼等は翼に翼をならべて飛ぶことはできません。

籠の格子を透して彼等は見つめてゐます。相互によく知り合ふことは絶望です。

彼等は惱ましげに翼を羽搏いて歌ひました、『わが戀人よ、ずつとおより！』

自由な小鳥が叫びました、『近よることは出來ない、私は

籠の閉つた戸が恐怖い。』

籠の小鳥が呟くやう、『あゝ私の翼は力も入らず死んで居ます。』

おゝ母様、若い王様が吾家の戸口を お通りになります

O MOTHER, THE YOUNG PRINCE IS TO PASS BY OUR DOOR,——

おゝ母様、若い王様が吾家の戸口をお通りになります——
——何うして今朝仕事が手につきませう？
甚麼風に髪を結つたらいゝてせう、甚麼風に衣裳をつけたら宜いでせう。
どうして驚愕して私をご覧なさるの、母様？

私は王様がちよつとも私の窓の方へは顧眄きなさらぬことを知つてゐます。眼が一度まばたきする間にあの方は行つておしまひになることも知つてゐます。たゞ笛の消えかける餘韻ばかりが遠い方からすゝりなきながら私を訪れるでせう。
だけども若い王様は吾家の戸口をお通りになるでせう。
そしてその瞬間こそ私は一番美い衣裳を着ませう。
おゝ母様、若い王様が吾家の戸口をお通りになりました。
朝陽がお馬車からキラキラかゞやきました。
私は面紗を顔から掃ひ捨てました、私は頸から紅玉の頸

環をひきちぎりました、そしてお通りの道筋へ投げました。

何うして驚愕して私をご覽なさるの、母様？

私はあの方が私の頸環をお拾ひにならなかつたことを知つて居ります。その頸環が轍の痕に粉微塵に碎けて、塵埃の上に紅い色を殘したのを知つてゐます。そして誰も私の贈物が何であつたか、また誰にさゝげたのか知りません。

だけども若い王様が吾家の戸口をお通りになりました。

而して私はお通りの道筋へ胸から寶玉を毟つて投げま

した。

私が夜ひとりで媾曳にゆく折に

WHEN I GO ALONE AT NIGHT TO MY LOVE-TRYST,

私が夜ひとりて媾曳にゆく折に、鳥も歌はず、風もそよがず、街衢の兩側の家々は沈默して立つてゐます。

一歩毎に高い音をたてるのは私の踝環です、私は羞恥します。

私は露台に坐つて彼のひとの跫音に耳をすます、樹には葉摺れの音も聞えません、水は河流のなかに靜まりかへつて、丁度ぐつすり睡こんだ哨兵の膝の上の劍のやうです。

激しく搏つのは私自身の情です、——どうしたら靜まるのでせう。

私の戀人が來て私の傍に坐る折に、私の軀が顫へ、私の眼瞼が垂れる折に、夜は次第に暗くなります、風が燈火を消します、そして雲が星辰の上に面紗を曳きます。キラキラ閃いて光を放つものは私の胸の寶玉です。どうしたらそれが隱せるのでせう。

寢床の傍の燈が消えたときに

WHEN THE LAMP WENT OUT BY MY BED,

寢床の傍の燈が消えたときに、私は早起の小鳥と一緒に眼を覺しました。

私はみだれ髪の上に新しい花環をつけて、開いた窓のところに坐りました。

若い旅人が、曉の薔薇色の靄のかゝつた道をやつてまゐりました。

その首には眞珠の頸環をつけ、太陽の光がその冠の上に

ふりそゝいでゐました。彼は戸口に停歩つて眞面目な聲で私に訊ねました、『彼の女は那邊に居るのでせう?』

羞かしくてどうとも答へられませんでした、『彼の女と被仰るのは私なんです、若い旅人よ、彼の女は私です。』

夕暮方でした、燈はともつてゐませんでした。

私はうつかり髪を結うて居りました。

若い旅人が馬車に乘つて夕陽の光をあびてやつて參りました。

馬は口ばたに泡をふき、旅人の着物は埃だらけでした。

彼は戸口で下りて疲れた聲で訊ねました。『彼の女は那邊に居るのでせうか？』

恥かしくてどうとも答へられませんでした、『彼の女と被仰るのは私なんです、勞れた旅人よ、彼の女は私です。』

四月の晩、燈は私の部屋を照して居ます。

南の微風がしとやかに吹いて、騷々しい鸚鵡は籠のなかで眠つて居ます。

私の胸衣は孔雀の咽喉の色彩です。私の外套は嫩草の綠色です。

私は窓側の床の上に坐つて荒廢た町を眺めて居ます。

暗い夜のあけるまで私は呟き續けます、『彼の女と被仰るのは私です、絶望した旅人よ、彼の女は私です。』

その儘お前の仕事をしておいで、花嫁よ

LET YOUR WORK BE, BRIDE.

その儘お前の仕事をしておいて、花嫁よ。ほら、お客さまが被入したよ。

ねえお聞き、あの方が扉に結んである鎖を静かに振つておいてになるのぢやないかい？

お前の踵環が高い音をたてぬやうに氣をおつけ、そしてお前の足があの方に逢はうと思つて地團駄を踏まぬやうに氣をおつけ。

その儘お前の仕事をしておいて、花嫁よ、お客さまが日暮に被入しつたよ。

いゝえ、陰慘い風ではないよ、花嫁よ、驚愕することはない。

四月の晩の滿月なのよ、影が庭のなかに青白いこと。大空は頭の上にかゝいて居ます。

若し被りたいのならお前の面紗をお冠り、もし恐かつたら扉口へ燈を持つておいで。

いゝえ、陰慘い風ではないよ、花嫁よ、驚愕することは

ない。
若し怖かつたら彼の方と一語も話すんぢやないよ、あの
方と逢ふときには扉口をすこし離れてお立ち。
若しもあの方が何かお尋ねになつたら、そして若しお前
がお答へしやうと思ふのなら、お前は緘默つてお前の
瞳をうつむけるのですよ。
燈を手にもつてあの方を案内するときに、お前の腕環を
釘鐺鳴らしてはいけませんよ。
若し恥かしいのなら彼の方と一語も話すんぢやないよ。

まだお前は仕事が濟まないのかい？　花嫁よ？　ほら、
お客さまが被入したよ。
お前は牛小舍の灯をおつけだつたかい？
お前は晩方のお祈りのため供養の籠を仕度して置かなか
つたのかい？
お前は頭髪の分け目へ紅い幸福の御符をおつけではない
かい？　そして夜のお化粧をおすましなの？
おゝ花嫁！　お客さまが被入したのが聞えるの？
その儘お前の仕事をしておいで！

それなりでおいで、お化粧にひまをおつぶしでない

COME AS YOU ARE; DO NOT LOITER OVER YOUR TOILET.

それなりでおいで、お化粧にひまをおつぶしでない。
お前の結つた髪が解けても、髪の分け目が眞直に分れないでも、胸衣の紐飾りが結ばれないでも、氣におかけてない。
それなりでおいで、お化粧にひまをおつぶしでない。

おいで、草の上を走つておいで。
露のためにお前の足が汚れても、お前の足の鈴のひゞきが止んでも、またお前の首飾から眞珠が落ちても、氣におかけてない。
おいで、草の上を走つておいで。

お前は雲が空を隱すのをみたの？
鶴の群が遙かな河岸から飛びたちます、そして風の定まりのない起りが灌木の荒地を越えて走ります。

臆病な家畜は村落の檻のなかへ急ぎます。
お前は雲が空を隠すのを見たの？
効もないのにお前は化粧部屋の燈を點してゐます、——
燈がゆらめいて風に消えてしまひました。
お前の眼瞼が油烟に觸りはしなかつたか誰が知つてゐま
せうか？
お前の眼瞼は雨雲よりも黝んでゐます。
効もないのにお前は化粧部屋の燈を點してゐます、——
燈は消えました。

それなりておいで、お化粧にひまをおつぶしでない。
花環がまだ編んでなくてもかまふことはない。若しも手
頸の鏈が繫がれてなくても、それでいゝ。
大空が雲でもつてすつかり曇りました、——夜が更けま
した。
それなりておいで、お化粧にひまをおつぶしてない。

若しお前が忙しいのに水甕に汲まうと思ふなら、おいで

IF YOU WOULD BE BUSY AND FILL YOUR PITCHER, COME,

若しお前が忙しいのに水甕に汲まうと思ふなら、おいで、
おゝ私の湖においで。
水がお前の足に纏んで、秘密をお前にさゝやくだらう。
今にも降りだしそうな雨の陰翳が砂の上に落ちてゐる。
そして雲は青い並樹の上に低う垂れて、お前の眉毛の

上に房々と黒髪がさがつたやうです。
私はお前の歩行の旋律をよく知つてゐる。それが私の胸
のなかに動氣うつてゐる。
おいで、おゝ私の湖においで、もしお前が水甕に汲まね
ばならぬなら。
若しお前が惰けてゐて茫然坐つて、お前の水甕を水の上
に泛べやうと思ふなら、おいで、おゝ私の湖においで。
草の傾斜は青々として、野生の花が數へきれぬほど咲い
てゐる。

お前の想はお前の黒い瞳から、丁度鳥が巣から立つやうにさ迷ひ出るであらう。
お前の面紗は足もとにすべり落ちるであらう。
おいで、おゝ私の湖においで、若しお前が惰けて座つてゐたいなら。

若しお前が遊びをやめて水の中に潜りたいなら、おいで、
おゝ私の湖においで。
お前の空色の外套を岸邊に置いてご覧、青い水がお前を
包んで、お前を隠すだらう。

波がお前の頸に接吻しやうと思つてまたお前の耳に私語
かうと思つて、爪立をするであらう。
おいで、おゝ私の湖においで、若しお前が水の中に潜り
たいなら。

若しもお前も狂氣になつて、水のなかへ飛込て死なねば
ならぬなら、おいで、おゝ私の湖においで。
そこは冷たくて深さの知れぬほど深い。
そこは夢も見ぬ睡のやうに暗い。
その底では夜も晝も一つである。そして唄は沈默である。

おいで、おゝ私の湖において、若しお前が飛込んで死に
たいなら。

私は何も尋ねなかつた

I ASKED NOTHING,

私は何も尋ねなかつた、たゞ樹の後になつて森の端に立
つて居た。
懈怠さはまだ曙の眼のうへにたゞよひ、露は空中にこも
つてゐた。
濕つた草の懶い匂が、地上の薄靄のなかに搖蕩ふてゐた。
婆拏耶拏樹の下でお前は手で牝牛の乳を搾つて居た、牛
酪のやうに柔かな爽かなその手で。

そして私は凝と立つてゐた。

私は一言も發言はなかつた。樹の繁みに姿を匿して歌つたのは小鳥であつた。

芒果樹は村の道の上に花を雨降らせてゐた、また蜜蜂は一疋一疋唸りながらとんで行つた。

池の端の涇姿の神殿の扉は開いてゐて、禮拜者が讃美歌をうたひはじめて居た。

お前は膝の上に壺をかゝへて牝牛の乳を搾つて居た。

私は空虛の鑵を提げて佇んでゐた。

私はお前の傍へよらなかつた。

大空は寺で鳴る銅鑼のひゞきで眼を醒した。

道では追はれてゆく家畜の蹄から塵埃をたてゝゐた。

どくどく水のこぼれる水甕を背負ふて、女達が河から歸つてきた。

お前の腕環は釘鐺鳴つてゐた、そして乳壺からは緣に溢れて泡立つてゐた。

朝はしづかに過ぎてゆく、私はお前の傍によらなかつた。

私は路を歩いて居た

I WAS WALKING BY THE ROAD,

私は路を歩いて居た、何故といふわけもない。その時正午は過ぎてゐて、竹の梢が風にさらさと鳴つて居た。

俯いた陰翳が彼等ののさばつた腕をつき出して、倉忙の光りの足に絡み着いてゐた。

コヱルは唄ひ疲れてゐた。

私は路を歩いてゐた、何故といふわけもない。

川端の小舍は蔽ひかゝつた樹て陰になつてゐた。

誰だか、女が忙しさうに仕事をして、その環飾りが隅の方て樂の音にひゞいてゐた。

私はこの小舍の前に佇んでゐた、何故といふ譯もない。

狹い屈曲した路が數かぎりも知れぬ芥子畑や數かぎりも知れぬ芒果の森を横切つてゐる。

路は村の寺の側を通り、又川の埠頭の市場の傍を通つてゐる。

私はこの小舍の前に佇んでゐた、何故といふ譯もない。

數年前に、微風の吹く三月の或る日のこと、春の私語は
もの倦く、芒果の花は埃の上に落ちてゐた。
漣漪をたてる水は跳ね上つて埠頭の石段の上にある眞鍮
の壺を舐めて居た。
私は微風の吹く三月のその日を想ひうかべた、何故とい
ふわけもない。

陰影は次第に深まり家畜は彼等の檻のなかへ歸つてゆく。
光はもの寥しい牧場の上に灰ばんできて、村人等が岸邊

て渡船を待つてゐる。
私はゆつくり家路に歸つてゆく、何故といふわけはない。

私は森の下闇を走る麝香鹿のやうに走る

I RUN AS A MUSK-DEER RUNS IN THE SHADOW OF THE FOREST.

私は森の下闇を走る麝香鹿のやうに走る、彼自身の香氣に狂ふて走るやうに。

夜は五月半ばの夜である。微風は南の微風である。

私は行手がわからなくなつてさ迷うてゐる。私は得られないものを欲求める、そして私が欲求もしないものを

得て居る。

私の情から私自身の渇望の心象が顯はれて舞踏をする。

燿く幻影が飄搖いて居る。

私はそれを確乎つかまうとする、それは私を避けて、私を途方にくれさせる。

私は得られないものを欲求める、そして私が欲求めもしないものを得てゐる。

手は手に凭りかゝり、眼は眼にためらはせて

HANDS CLING TO HANDS AND EYES LINGER ON EYES:

手は手に凭りかゝり、眼は眼にためらはせて　斯うして
ゐて私達の心情の記錄が始まる。
三月の月光がゞやく晩に、指甲花のきつい芳香が空中に
たゞよふて、私の笛は忘れられて地上におかれ、お前
の花環はまだ編みかけてある。

お前と私の愛は歌のやうに單純である。
咱芙藍色のお前の面紗が私の眼を醉ひどれにする。
私に編んでくれた素馨花の花環が稱讃のやう私の胸をと
ゞろかしめる。
それは與へることゝ與へぬことゝの遊戯である。またう
ちあけることゝ隱すことゝの遊戯である。或は微笑み、
或はちよつとの含羞、また或は他愛もない甘い相剋で
ある。
お前と私の愛は歌のやうに單純である。

現在を超えて神秘は斷じて無い。不可能に對する以外に
努力は斷じて無い。
魅力の背後に陰影はない。暗闇の底に摸索して覓むべき
ものはない。
お前と私の愛は歌のやうに單純である。
私達は一切の言葉を脱けて永劫の沈默のなかを漂浪ふて
はゐない。私たちは希望を越えて物質に對する虚無に
同意をしては居ない。

私達が與へたり取つたりするものはもう充分である。
私たちはまだ懽喜を極上になるまで歴しつぶして、それから苦患の酒を搾つては居ない。
お前と私の愛は歌のやうに單純である。

黄色な小鳥が樹の間で啼いてゐて

THE YELL W BIRD SINGS IN THEIR TREE

黄色な小鳥が樹の間で啼いてゐて、私の心を歡喜で躍らせてゐる。

私達は一緒に同じ村に住んでゐる。そのことが私達の喜悦のひとつである。

彼の女の小さな羔の番がうちの裏庭の樹蔭に草を食べに來る。

若し彼等がうちの黍畑に迷ひこんだなら、私は彼等を腕

で抱へてやります。

私達の村の名はカンジャナーと云ひます。私達の川の名はアンジャナーと云ひます。

私の名はあらゆる村々によく知られてゐる、そして彼の女の名はランジャナーと云ひます。

私達の間にはたつたひとつの畑があるばかりです。

うちの森に巣をつくつてゐる蜜蜂が蜜を搜しに各々の領分に行きます。

花々はその埠頭の石段から進水して、私達が行水をして

ゐる流に沿うて漂ふてゆきます。
枯れ凋んだクスムの花の籠が畑から村の市場に着きます。
私達の村の名はカンジャナーと云ひます。私達の川の名
はアンジャナーと云ひます。
私の名はあらゆる村々によく知られてゐる、そして彼の
女の名はランジャナーと云ひます。

彼等の家へむけて屈曲してゐる小徑は芒果の花ざかりの
春に馥郁かほつて居る。
彼等の亞麻仁が收穫できるやう稔つたときは　大麻はう

ちの畑で花を咲かせます。
彼等の小舍の上に微笑んでゐる星辰が、私達に同じ様な
眼瞬の貌をむけて居る。
彼等の水槽を溢れる雨が、私達のカダムの森をよろこば
せます。
私達の村の名はカンジャナーと云ひます。私達の川の名
はアンジャナーと云ひます。
私の名はあらゆる村々によく知られてゐます、そして彼
の女の名はランジャナーと云ひます。

二人の姉妹が水を汲みにきた折に

WHEN THE TWO SISTERS GO TO FETCH WATER,

二人の姉妹が水を汲みにきた折に、彼等はこの場所に來て嫣然する。

彼等は彼等が水を汲みにきた折に、いつでも樹立の背後に佇んでゐる誰やらに合圖をせねばならぬ。

二人の姉妹が此の場所を通るときは私語を交します。

彼等は彼等が水を汲みにきた折に、いつでも樹立の背後に佇んでゐる誰やらの秘密を解かねばなりませぬ。

彼等の水甕が突如に傾斜いて、彼等がこの場所にきた折に水が瀝れる。

彼等は彼等が水を汲みにきた折に、いつでも樹立の背後に佇んでゐる誰やらの胸が動悸うつてゐるのを氣付かねばなりませぬ。

二人の姉妹がこの場所へきた折に顏を見合せます、そして嫣然する。

彼等の早足はからから笑つてゐるやうです。その足が彼

等が水を汲みに來た折に、いつでも樹立の背後に佇んてゐる誰やらの心を攪き亂します。

お前は川沿ひの道を

YOU WALKED BY THE RIVERSIDE PATH

お前は川沿ひの道をだぶだぶ溢れた水甕を背負ふて行く。
何故お前は敏捷く顔を向けて翻々する面紗越しに私をそつと偸視いたか。
厥の暗黒からかゞやく貌が私を訪れた、丁度微風が、漣漪をたてる水のなかへわなゝきを送つて、陰所の濱邊に掃滅すやうに。
その一視は私を訪れた、丁度夜の小鳥が燈火のない室を

一方の開いた窓からまた一方へうろたへて横ぎつて飛んで、夜のなかへ消えるやうに。

お前は小山の背後の星のやうに隠されてゐる、そして私は往來をとぼりかゝりのものである。

だけども何故お前はその瞬間たちどまつて、お前が川沿ひの道をだぶだぶ溢れた水甕を背負ふて歩いてゐるのに、面紗ごしに私の顔をちらと視たか？

毎日毎日彼は來たり往つたりする

DAY AFTER DAY HE COMES AND GOES AWAY.

毎日毎日彼は來たり往つたりする。

行つて、あの人におやり妾の髪から花をとつて、友よ。

若しあの人がそれを呉れるのは誰かと尋ねたら、妾はあなたがあの人に妾の名を被仰らないやうに希求ひます

——何故かといふにあの人はたゞ來たり往つたりしてゐるのだから。

あの人は樹の下の塵土のなかに座つてゐる。
彼處へ花々や木の葉で莚をひろげなさい。
彼の人の眼は愁然である、そしてその眼が妾の心に悲哀を齎します。
彼の人は心に想へてゐることを申しません。あの人はたゞ來たり往つたりして居る。

何故彼は私の戸口へ來るつもりになつたのか

WHY DID HE CHOOSE TO COME TO MY DOOR

何故彼は私の戸口へ來るつもりになつたのか、放浪の青年が、夜が白みそめた頃に。
私が出入りをする時にいつでも彼の傍をすれちがふ、そして私の眼は彼の顏とぴたり合ふ。
私は彼に言葉をかけてよいかまた默つてゐてよいか思案にくれてゐる。何故彼は私の戸口に來るつもりになつ

たのか？

七月には曇つた夜々が暗夜である。空は秋のみづあさぎ色である。春の日々は南の風で浮ついてゐる。

彼はいつでも新しい調子で歌を作曲してゐる。

私は仕事を歇めてふりむいて、私の眸は霧氣で充される。

何故彼は私の戸口に來るつもりになつたのか？

あの女が急ぎ足で私とすれ違つたときに

WHEN SHE PASSED BY ME WITH QUICK STEPS,

あの女が急ぎ足で私とすれ違つたときに、あの女の裳裾の端が私に觸つた。

胸のえも知れぬ島から春の思ひもかけぬ暖い吹息が訪れた。

飛び廻る感觸の羽搏が私を撫でゝ、急遽消えてしまつた、

宛然凋んだ花片が微風に吹き捲くられるやうに。

それが私の胸の上へ宛然あの女の軀の嗟歎のやうに、あの女の胸の私語のやうに、降りそゝいだ。

什うしてお前は其處へ座つて、お前の腕環を

WHY DO YOU SIT THERE AND JINGLE YOUR BRACELETS

什うしてお前は其處へ座つて、お前の腕環を單調な倦怠い場所で釘鐺鳴らしゐるのか。

お前の水甕に一杯お汲み。お前は家に歸らねばならぬ時刻である。

什うしてお前は手て水を攪拌しては、折々路の方の單調な倦怠い場所に居る誰やらを偸視るのか。

お前の水甕に一杯お汲み、そして家へお歸り。

朝がたつて——暗い水が流れてゐる。

波は單調な倦怠い場所で笑ひ合ひ囁き交はしてゐる。

漂ふ浮雲が大空の極の彼方の地平に聚つてゐる。

彼等は漂ふてお前の顏を凝視めて、單調な倦怠い場所に

嫣然してゐる。

お前の水甕に一杯お汲み、そして家へお歸り。

君の胸の秘密を包んでゐたまふな、友よ。

DO NOT KEEP TO YOURSELF THE SECRET OF YOUR HEART, MY FRIEND!

君の胸の秘密を包んでゐたまふな、友よ。
私にうちあけたまへ、私だけに、そつと。
靜粛な微笑を浮べてゐる君よ、やさしく囁てくれたまへ。
私の胸がその秘密をきくであらう、耳がきくのではない。

夜は更けて、家々は默つてゐる、小鳥の巣は睡を以て包まれてゐる。
私にうちあけたまへ、狐疑ふ涙を透して、口訥る微笑を透して、甘い含羞と苦しみとを透して、君の胸の秘密を。

私達に來れ、青年よ、私達に眞實告げよ

COME TO US, YOU!!!, TELL US TRULY,

『私達に來れ、青年よ、私達に眞實告げよ、どうしてお前の眼に狂氣があるのか？』

『私は何といふ野生の罌粟の酒を飲んだのやらわからない、この私の眼に狂氣があるといふのは。』

『あゝ醜辱い！』

『偖、ある者は賢く或者は馬鹿である、或る者は用心ぶか

く或るものは無頓着である。微笑する眼がある、泣く眼がある――そして私の眼には狂氣がある。』

『青年よ、何故お前は樹蔭でそんなに凝つと佇んでゐるのか？』

『私の足は私の情の重荷で困憊になつてゐる、それで私は樹蔭に凝つと立つてゐる。』

『あゝ醜辱い！』

『偖、ある者は彼等の道をすゝみ、或る者はさ迷うてゐる。或るものは自由であり　ある者は束縛されてゐる。そ

して私の足は私の情の重荷で困憊になつてゐる。

私は汝の同意の手から生まれたものを握つてゐる

WHAT COMES FROM YOUR WILLING HANDS I TAKE.

『私は汝の同意の手から生まれたものを握つてゐる。私はもう何もほしくはない。』

『さうです、さうです、妾はお前を知つて居ます、柔和な乞食よ、お前はひとりが持つてゐる一切を求めてゐるのです。

『若し私のために落ちた花があるなら、私はそれを私の情のなかへ着けるであらう。』

『たとひよしや荊棘でもつけるるの？』

『私は荊棘を堪え忍ぶでせう。』

『さうです、さうです、妾はお前を知つてゐます、柔和な乞食よ、お前はひとりが持つてゐる一切を求めてゐるのです。』

『若しほんの一度汝が愛慕い眸をあげて私の顔をみるならば、それが私の生命を死を越えて温柔にするであらう。』

『たとひよしや一途に殘忍な瞥見でもよいの？』

『私はそれをもつて私の情を突き刺すであらう。』

『さうです、さうです、妾はお前を知つてゐます、柔和な乞食よ、お前はひとりが持つてゐる一切を求めてゐるのです。』

縱令如何樣に悲愁を齎しても愛を信じなさい

TRUST LOVE EVEN IF IT BRINGS SORROW.

『縱令如何樣に悲愁を齎しても愛を信じなさい。そなたの心を鎖してはなりません。』

『あゝ、否、わが友よ、あなたの言葉は暗闇です、私は理解することができません。』

『情はたゞ、涙と歌とをもつて棄てるためなのです、わが

戀人よ。』

『あゝ、否、わが友よ、あなたの言葉は暗闇です、私は理解することができません。』

『歡樂は露の滴瀝よりも果敢ない、笑つてゐる最中に死んでしまふ、だけども悲愁は強いそして永遠である。悲しい戀をしてそなたの眼に覺醒させて呉れ。』

『あゝ、否、わが友よ、あなたの言葉は暗闇です、私は理解することができません。』

『蓮は太陽を仰ぎながら花を開いて、それが持つてゐるすべてを捨てる。それは永劫の冬の霧のなかで蕾のまゝで殘つては居ることはあるまい。』

『あゝ、否、わが友よ、あなたの言葉は暗闇です、私は理解することができません。』

お前の疑問の眼つきは傷ましい

YOUR QUESTIONING EYES ARE SAD.

お前の疑問の眼つきは傷ましい。彼等は私の意味を知らうと探ねて、宛然月が海の深さを測つてゐるやうである。

私は私の生命をお前の眼前に極から極まで、すつかり隱しもせず未練もなしに、裸にしてゐる。それがお前が私を知らない譯である。

若し私の生命が寶石であるとしたなら、私は千々に碎い

て、お前の頸にかけるやうに鏈にそれらを差し綴ることができやう。

もし私の生命が眞圓な小さな愛らしい花であるとしたなら、私はそれをお前の頭髮にさすやうに莖から摘みとることができやう。

だけどもそれは情である、わが愛人よ、那邊にその岸邊があり、那邊にその底があるのであらうか？

お前はこの王國の境界を知らない。それでもやはりお前はその女王である。

もしも私の生命がほんの歡樂の一瞬であるとしたなら、

それは安氣な一微笑に花を開いて、お前がそれを眺めることができやう、またそれを一瞬のうちに讀むこともできるであらう。

もしも私の生命が單に苦痛であるとしたならば、それは透明な涙のなかに融けて、無言でその最奥最秘の秘密を映すことができるであらう。

だけどもそれは愛である、わが愛人よ。

厭のたのしみもくるしみも彊はない、そしてその欲望も富も無窮である。

それはお前の生命のやうにお前に親密である、しかしお

前は全くどうしてもそれを知ることはできない。

妾に話して下さい戀人よ

SPEAK TO ME, MY LOVE!

妾に話して下さい。戀人よあなたが唄つてゐることを言葉で話して下さい。

夜は暗い。星は雲のなかに喪はれてゐる。風は青葉のなかで歎息をして居る。

妾は髪をほぐしませう。妾のあさぎ色の外袍が夜のやうに妾を包むでせう。妾はあなたの頭を妾の胸に犇と抱きませう、そしてその甘い寂寥のなかにあなたの情を

つぶやきなさい。妾は眼をつぶつて聽きませう。妾はあなたの顏を覗きますまい。

あなたの言葉が終つたときに、私達はじつと默つて座りませう。たゞ樹々だけが陰暗に囁くでせう。

夜が蒼白めてきませう。日が黎明となりませう。私達は相互の眼と眼を見つめて、ふたり方角の違つた細徑をたどりませう。

妾に話して下さい、戀人よ。あなたが唄つてゐることを言葉で話して下さい。

お前は私の夢の蒼穹をたゞよふ夕雲である

YOU ARE THE EVENING CLOUD FLOATING IN THE SKY OF MY DREAMS.

お前は私の夢の蒼穹をたゞよふ夕雲である。

私は斷へず私の愛のあこがれをもつて、お前を彩り、お前を形づくつてゐる。

お前は私の無窮の夢のうちの私自身の、私自身の「居住者」である。

お前の足は私の情の欲望の閃光で薇薔色にあかい、私の
落日の歌の「落穂拾者」よ。
お前の唇は私の苦患の酒の味で苦くて甘美い。
お前は私の寂寥の夢のうちの私自身の、私自身の「居住者」
である。

私の情熱の陰影をもつて私はお前の眼を幽暗くしてゐる、
私の凝視の奥底の「屢ば來る亡靈」よ！
私はお前を、私の音樂の網のなかへ捕へて包んでゐる、

戀人よ。
お前は私の不死の夢のうちの私自身の、私自身の「居住者」
である。

私のこゝろ、その曠野の小鳥は

MY HEART, THE BIRD OF THE WILDERNESS,

私のこゝろ、その曠野の小鳥は、そなた眼のうちに大空を見出した。

そなたの眼は朝の搖藍である。そなたの眼は星の王國である。

私の唄はそなたの深淵に失はれる。

私をしてたゞその大空のなかを翔けめぐらせてくれ、その寂しい無限のなかを。

私をしてたゞ大空の雲をかき分けながら大空の日光のなかに翅をひろげさせて呉れ。

妾に知らして頂戴、全く眞實なの、戀人よ

TELL ME IF THIS BE ALL TRUE, MY LOVER.

妾に知らして頂戴、全く眞實なの、戀人よ、妾に知らして頂戴、眞實なの。

この眼がその稻妻を閃かすときに、あなたの心では暗い雲が大風雨の答を返します。

眞實なのでせうか、妾の唇が、最初の悟をえた愛の綻びそめた蕾のやうに甘いといふのは？

五月の過ぎ去つた月々の思ひ出が妾の四肢にたゞよふてゐるのでせうか？

地界が竪琴のやうに妾の足の感觸で歌を彈奏するでせうか？

またそれから妾が見てゐる間は夜の眼から露が降り、そして凌晨の光は妾の軀をすつかり包んでしまつた時によろこぶといふのは眞實なのでせうか？

眞實なの、眞實なの、あなたの愛が孤獨で永い年月の間さまざまの世界を旅をして、妾を搜すといふことが？

とうとう妾を見付けだしたときに、あなたの年來の望が、

妾のやさしい言語のなかに、また妾の眸のなかに、唇のなかに、房々垂れた髪のなかに、完璧の平安を見出すといふのはほんとうなの？

またそれから無限の神秘がこの妾自身の小さな額に記されてゐるといふのは眞實なの？

妾に知らして頂戴、戀人よ、全くほんとうなの。

私はお前を愛する、戀びとよ

I LOVE YOU, BELOVED.

私はお前を愛する、戀びとよ。私の愛を宥して呉れ。

行衛を失うた小鳥のやうに私は捕へられてゐる。

私のこゝろが身顫ひするときに、その面紗をなくして裸になつてしまつた。私のこゝろを憐憫をもつて蔽ふてくれ。戀びとよ、そして私の愛を宥して呉れ。

若しお前が私を愛することができないなら、戀びとよ、

私の苦悶を宥して呉れ。
遠方から私を輕蔑んで凝視めるな。
私はそつと片隅にあとがへりをして暗闇のなかに座つて
ゐやう。
兩手をもつて私は自分の裸の羞恥を蔽ふであらう。
お前の顔を私からあちらへむけよ、戀びとよ私の苦悶を
宥してくれ。

若しお前が私を愛するならば戀びとよ、私のよろこびを
宥してくれ。

私のこゝろが禍祉の洪水で運び去られるときは、私の危
險な棄捨を笑うてはならぬ。
私が私の玉座に座つて、私の愛の暴虐でお前を支配する
ときにも、また私がお前に女神のごとくに私の恩惠を
允すときにも、私の矜持を堪え忍んでくれ、戀びとよ、
そして私のよろこびを宥して呉れ。

私の許もまたないで行つては
なりません、戀人よ

DO NOT GO, MYLOVE, WITHOUT ASKING MY
LEAVE.

私の許もまたないで行つてはなりません、戀人よ。
私は夜ぢう見守つてゐました。そして今私の眼は睡たく
てだるい。
私は私が眠つてゐるあひだにお前をなくしはしないかと
心配をする。

私の許(ゆるし)もまたないで行つてはなりません、戀人よ。

私は跳びあがつて手をのばしてお前に感觸(さわ)らうとした。

私は獨白(ひとりごと)を云ふ、『夢ではないかしら？』

私はたゞ私のこゝろをもつてお前の足に纏ひついて、私の胸にしつかり抱きしめることができたらいゝものを！

私の許(ゆるし)もまたないで行つてはなりません、戀人よ。

私があまり易々とお前を理會んでしまはぬやうに

LEST I SHOULD KNOW YOU TOO EASILY,

私があまり易々とお前を理會んでしまはぬやうに、お前は私と遊んで居る。

お前はお前の涙を匿すために、笑の閃光をもつて私を盲目にする。

私は知つてゐる、私はお前の術を知つてゐる。お前は云はうと思ふ言葉を決して云つたことがない。

私がお前を生捕ることができぬやうに、お前は千の方角へ私を遁れてゐる。

私がお前を大勢で周章さすことができぬやうに、お前は離れて立つてゐる。

私は知つてゐる、私はお前の術を知つてゐる。

お前はゆかうと思ふ逕を決して歩いたことがない。

お前の要求は他のものゝよりも餘計である、それがお前が默りこんでゐる譯なのだ。

ふざけた無邪氣でお前は私の贈物を擯けてゐる。
私は知つてゐる、私はお前の術を知つてゐる。
お前は欲しいと思ふものを決してとらないのであらう。

彼は囁いた、「戀人よ、お前の眼をおあげ」

HE WHISPERED, "MY LOVE, RAISE YOUR EYES."

彼は囁いた、『戀人よ、お前の眼をおあげ。』
妾はするどく彼を叱つて、云つた、『行つておしまひ！』
それでも彼は身動きもしなかつた。
彼は妾の前に立つて、妾の手を握つた。私は云つた、『私をのいて下さい！』それでも彼は去らなかつた。

彼は顔を妾の耳の邊によせた。妾は一瞥て彼に云つた、
『何といふ侮辱でせう！』それでも彼は動かなかつた。
彼の唇が妾の頰に觸りました。妾は身震ひをして云つた、
『あなたはあんまり鐵面皮です。』だけども彼は羞恥を感
じなかつた。

彼は妾の髪に花を挿しました。妾は云つた、『入りません
よ。』だけども彼はじつと立つて居た。
彼は妾の頸から花環をとつて行つてしまひました。妾は

泣いて妾の心に訊ねました、『何故あのひとは歸つて來
ないのでせうね？』

おまへは新しい花の花環を私の頸に
かけやうと思ふの、美しいひとよ？

WOULD YOU PUT YOUR WREATH OF FRESH
FLOWERS ON MY NECK, FAIR ONE ?

おまへは新しい花の花環を私の頸にかけやうと思ふの、
美しいひとよ？
しかしながらおまへは悟らねばならぬ、その私の編んだ
一つの花環は大勢のためにつくられたのである、ちら
と一瞥(ひとめみ)た人々のために、或はまだ探險しない國々に住

む人々のために　或は詩人の歌のなかに住む人々のた
めに。

返却するのにお前自身のものかどうかを、私のこゝろに
尋ねるのはあまり遲すぎる。
私の生命が蓄のやうであつたとき、すべて厥(そ)の香氣が厥(そ)
の心(しん)のなかに蓄へられてあつたときに時間があつたの
だ。
今はそれは遙かに擴く浪費せられてゐる。
誰がそれを蒐めて再び密閉することができる魔法を知つ

てゐるのであらうか？

私のこゝろはたゞ一人に與へるための私のものではない

それは大勢に與へられてゐるのである。

わが戀人よ、昔々そなたの詩人が彼の心のなかで一大抒事詩を進水した

MY LOVE, ONCE UPON A TIME YOUR POET
LAUNCHED A GREAT EPIC IN HIS MIND.

わが戀人よ、昔々そなたの詩人が彼の心のなかで一大抒事詩を進水した。

嗟吁、私は不注意であつた、而してそれがそなたの釘鐺なる蹂環にぶつつかつて、悲慘が惹起つた。

それが小唄の片節に碎かれてそなたの足もとにまきち

された。

古の戰爭の譚のあらゆる私の載貨がから〳〵笑ふ波にうちあげられ、涙のなかに漬かつて沈んだ。

そなたはこの喪失を私に償ふて呉れねばならぬ、わが戀人よ。

若し死後の不死の名譽に對する私の要求が粉碎されてゐるなら、私の生きてゐる間に私を不死にして呉れ。

そして私は私の喪失を歎くまい、またそなたをも侮辱はしまい。

わたしは朝ぢうかゝつて花環を編まうとして居るのに

I TRY TO WEAVE A WREATH ALL THE MORNING,

わたしは朝ぢうかゝつて花環を編まうとして居るのに、花がすべつてばらばらに落ちる。

お前は彼處に座つてお前の窺探の眼の隅から秘密とわたしを凝視めて居る。

この眼にきいて御覽、暗黑に企てられる禍患を、それは誰の非行であつたのか。

わたしは唄を歌はうとしたが、どうしても歌へない。
隱れた微笑がお前の唇にちらついてゐる。それにきいて
ご覽、私の失敗の理由を。
お前の嬌然した唇をして咒文を唱へさせよ、どのやうに
わたしの聲が、ちようど蓮華のなかで醉ひどれになつ
た蜜蜂のやうに、沈默のなかへ自滅するであらうかを。
日が暮れた、そして花々はその花瓣を閉ぢる時刻である。
お前の傍に座つてもいゝか、わたしに許して呉れ、そし

てわたしの唇が沈默の裡に於いてまた星の薄明りのな
かに於いて爲しうる仕事をせよと命じて呉れ。

疑惑の微笑がお前の眸に飄搖いてゐる

AN UNBELIEVING SMILE FLITS ON YOUR EYES

疑惑の微笑がお前の眸に飄搖いてゐる、わたしが訣辭をしにお前の許にやつて來たときに。

わたしはこれまで幾度も幾度も訣辭をしてゐるから、お前は私がすぐ歸つてくるのをよくのみこんでゐる程である。

わたしは信實をお前に云ふのに、私もこゝろのなかで同じ疑念を抱いて居る。

春の日々が度々歸つてくることに對しても、滿月が暇を告げて再び訪れることに對しても、花々が年々歳々その枝上で顏を赭らめることに對しても、疑惑を抱いてゐる。またそれは宛然わたしが訣辭をしてゐるのは再びお前に歸つてきたい一途のためであるのと同じことである。

だけども霎時幻妄を捕へよ、それを無作法な躁急で追ひたてゝはならぬ。

わたしがお前にいつのときでも告別といふ折には、どうぞそれが眞實の離別だと思つて呉れ、そして涙の霧氣

をして一瞬の間お前の眼の暗い縁を一層深沈めさせて
呉れ。
それから微笑を、わたしが歸つてきた折には、どうぞお
前のおもひ存分に快狡にして呉れ。

わたしがお前にうちあけねばならぬ
奥底の言葉を云はうと欲ふのに

I LONG TO SPEAK THE DEEPEST WORDS I HAVE
TO SAY YOU,

わたしがお前にうちあけねばならぬ奥底の言葉を云はう
と欲ふのに、わたしには勇氣がない、お前が笑ふだら
うと心配をして。
それがわたしが自分自身で笑うて、私の秘密を戯謔のな
かに打壊してしまふ理由である。

わたしは自分の苦悶を輕蔑んでゐる、お前がさうするだらうと氣にしてゐるのだ。

わたしがお前にうちあけねばならぬ最も信實の言葉を云はうと欲うのに、わたしには勇氣がない。お前がそれを信じまいと心配をして。

それがわたしが不眞實のなかにその姿をまぎらかして、わたしが想ふことの反對を云つてゐる理由である。

わたしは自分の苦悶を不合理にあらはしてゐる、お前がさうするだらうと氣にしてゐるのだ。

わたしがお前に對して持つてゐる最も貴重な言葉を使はうと欲ふのに、わたしには勇氣がない、同樣の價値が私に拂ふて貰へぬだらうと心配をして。

それがわたしがお前に難解い名指しを云つて、わたしの無感覺な力を自慢してゐる理由である。

わたしはお前の感情を缺つけてゐる、お前は決してどのやうな苦悶も知らないだらうと氣にしてゐるからだ。

わたしはお前の傍に寂然と座りたいと欲ふのに、わたし

には勇氣がない、わたしの情をわたしの唇から洩らさせまいとして。

それがわたしが輕薄に片言を云つたり問語をして、わたしの情を言葉の裏に匿してゐる理由である。

わたしは粗暴に自分の苦悶をとり扱うてゐる、お前がそのやうにするだらうと氣にしてゐるからだ。

わたしはお前の前から去らうと欲ふのに、わたしには勇氣がない、わたしの憶病をお前が氣付きはしないかと心配をして。

それがわたしが頭を高くあげて、疎忽にお前の眼の前に現はれる理由である。

お前の眼からの不變の衝動がわたしの苦悶を永劫に新しく保つてゐる。

おゝ狂人よ、豪壯に醉ばらつた狂人よ

O MAD, SUPERBLY DRUNK,

おゝ狂人よ、豪壯に醉ばらつた狂人よ、
若しお前が戸を蹴つてあけて、公衆にくだをまくならば、
若しお前が夜のなかへお前の財布をはたいて、節儉をさ
　げすむならば、
若しお前が奇體な小路に足を踏みいれて、やくざなこと
　をなぐさむならば、
詩や理性に頓着をするな、

若しお前の帆が暴風雨の前に揚げられたなら、舵は二つ
　にへし折つてしまへ。
そんなら私はお前に從はう、仲間よ、そして醉ばらへよ、
　そして滅亡してしまへ。

私は自分の毎日毎夜を堅實な賢い隣人と伴侶になるため
　に空費してゐる。
澤山に怜悧くなることが私の髪を灰色にしてゐる、また
　澤山に監視ることが私の視力を霞ませてゐる。
數年の間私は物質の瑣碎や斷片を蒐めて積んでゐる。

それを蹂躙つて、その上で舞踏をせい、そしてすつかり
それを風に撒布してしまへ。
何故かといふに、私は酔ぱらつて滅亡することが知慧の
絶頂であることを知つて居るからだ。

一切の欺偽的の逡巡をぶち消してしまへ、私をして私の
行手を失うて絶望的にさせてくれ。
兇暴な眩暈の疾風を吹き來らしめて、私を私の錨からひ
つさらつてくれ。
現世は、有益な賢明な、價値ある人々や、働く人々をも

つて群がつてゐる。
其處には容易に首である人々がある、また禮義にあつく
あとから從いてゆく人々がある。
彼等を幸福にし繁榮させよ、そして私は愚蠢な無用物に
してくれ。
何故かといふに、私は酔ぱらつて滅亡することがあらゆ
る事業の終局であることを知つてゐるからだ。
私はこの瞬間あらゆる欲求を禮義にあつい人の階級に讓
ることを誓ふ。

私は私の智識の衿持を、また善惡の判斷を捨てる。
私は記憶の水甕を千々にぶつ壞して、涙の最後の滴瀝もまき散らしてしまはう。
苺のやうに紅い酒の泡をもつて、私は行水をして私の笑をかゞやかしめやう。
市民であり恒心あるひとの徽章を、私は手當り次第細片に引裂かう。
私は無價値になるために、醉ぱらつて滅亡するために、神に誓をたてやう。

否、わが友よ、わたしは決して隱遁者にはなるまい

NO, MY FRIENDS, I SHALL NEVER BE AN ASCETIC,

否、わが友よ、わたしは決して隱遁者にはなるまい、何を君が言はうとも。
否、わたしは決して隱遁者にはなるまい、もしや彼の女がわたしとの誓を守らないでも。
わたしは堅く決心をしてゐる、もしやわたしが陰翳になつた隱所を見出すことができないでも、またわたしの

滅罪の苦行に對して伴侶も見出すことができないでも、
私は決して隱遁者には成るまい。

否、わが友よ、わたしは決してわたしの爐邊と生家とを
見捨てまい、そして決して森林の孤獨に遁世はすまい。
もしや谺をかへす樹蔭に嫵しい笑ひ聲がすこしも響か
ないでも、若しや咱夫藍の外套の端がひとつも風に羽
搏をしないでも、その沈默がやさしい私語で一層深沈
としないても。

私は決して隱遁者にはなるまい。

尊者よ この二人の罪人を赦せよ

REEVEND SIR, FORGIVE THIS PAIR OF SINNERS.

尊者よ、この二人の罪人を赦せよ。春風は今日粗暴な渦
のなかを吹いてゐて、塵埃を捲きたて、枯葉を吹きま
くり、そのうちにお前の教誡はすつかり喪はれてゐる。
語りたまふな、教父よ、生は空虛であることを。
何故かといふに、私達は唯の一度、死と休戰をして、そ
して馥郁たるほんの僅かな時間のあひだだけ、私たち
ふたりは不死にせられてゐるからです。

縱令王の軍隊が來て私たちを激しく不意に襲うても、私達は嚴として屈せず首をふつて云うてあらう、兄弟よ、お前たちは私たちを侵害してゐる。若しお前たちがこの嘈々しい遊戯をしなければならぬといふのなら、ほかの場所へ行つてお前たちの武器をがちやがちやいはすが宜い。何故かといふに私達は飛去つてゆくほんの僅な瞬間のあひだ丈け、不死にせられてゐるからです。

若し親しい人々が來て私達の周圍に群がるならば、私た

ちは謙遜に頭を垂れて云ふ。此の法外の幸運は私達には迷惑であります。無限の大空には私たちが住むべき空所はありません。何故かといふに、春の盛りの花々は大勢で押し寄せ、蜜蜂の忙しい翅は相互にせぎ合ふてゐるではありませんか。私たち唯ふたりの不死者が住む場所は、あまりに不合理に狹隘いではありませんか。

行かねばならぬ旅客には神の速力を命ぜよ

TO THE GUESTS THAT MUST GO BID GOD'S SPEED

行かねばならぬ旅客には神の速力を命ぜよ、そして彼等の歩行のあらゆる足跡を掃き消してしまへ。

容易いこと、單純なこと、手近いことをお前の胸に微笑をもつて抱けよ。

今日は、何時死んだかも知らない暢氣な亡靈の祭日である。

お前の笑ひ聲をたゞ他愛もない歡樂とせよ、宛然漣漪の上の光の眼ばたきのやうに。

お前の生命を時刻の端の上で輕く舞踏させよ、宛然木の葉の尖端の露のやうに。

おまへの竪琴から或は起り或は息む瞬時の音律を、絃にかきならせよ。

おまへはわたしを殘しておまへの道を辿つて行つた

YOU LEFT ME AND WENT ON YOUR WAY.

おまへはわたしを殘しておまへの道を辿つて行つた。
わたしはお前のために泣かねばならぬ、そして私の情の
なかにお前の孤獨な影像を、黄金の唄に織りこんで飾
らねばならぬと思つた。
しかしながら嗟吁、わが惡の運命よ、時は短い。

青春は一年一年毎に頽廢する、春の日々は逃亡してゐる、
脆い花々は他愛もなく死んでゆく、そして聖者は私を
戒める、生はたゞ蓮の葉のうへの露滴にすぎぬと。
私はすべてこの世を棄てねばならぬのか、私に背をむけ
て去つた彼の女のあとを見守るためには。
それは無益な馬鹿なことだ、時は短い。

それならば、おいで、ばたばた跫音をさせるわたしの雨
の夜々よ、笑つてご覽。わたしの金色の秋よ、おいで、
氣輕な四月よ、お前の接吻を汎く撒きながらおいで。

お前が來る、そしてお前、そしてまたお前も！
わたしの戀人達よ、お前たちは知つてゐる——私ども(わたし)は死すべきものである。彼の女のこゝろをとり喪ふ(うしな)ものに對してそのものゝ情(こゝろ)を破るといふのは賢いことであるか。時は短い。

片隅に座つて瞑想するのは溫柔(こゝちよ)いことである、お前が全くわたしの世界であることを詩に綴るために。
その悲哀をじつと懷(だ)きしめて、慰められまいと決心するのは雄々しいことである。

しかしながら新しい顏が私の戸を横切つて覗いて、その眼がわたしの眼を見あげる。
わたしはわたしの涙を拭うて、わたしの歌の調子を變へないわけにはゆかない。
何故かといふに、時は短い。

若しお前が歌めてほしいと思ふなら私は唄をやめやう

IF YOU WOULD HAVE IT SO, I WILL END MY SINGING.

若しお前が歌めてほしいと思ふのなら、私は唄をやめやう。

若しお前の胸をそはそはさせるといふのなら、わたしはお前の顔から私の眼をとり除けやう。

もしお前が歩くときに突如に驚愕させるといふのなら、

わたしは歩みを轉じてほかの道をゆかう。

もしお前が花を編んでゐる邪魔になるといふのなら、わたしはお前のもの靜かな花園を避けるであらう。

もし水を放埒にし亂暴にするといふのなら、わたしはわたしの扁舟をお前の岸に沿うて漕ぎはしない。

お前の溫柔い縲紲から私を解いてくれ、戀人よ

FREE ME FROM THE BONDS OF YOUR SWEETNESS MY LOVE!

お前の溫柔い縲紲から私を解いてくれ、戀人よ。この接吻の酒を最う强いないでくれ。

このきつい芳香の靄が私の心を窒息させる。戸を開けて、朝の光のために道をあけてくれ。私はお前の熱愛の抱擁のなかに包まれてゐて、お前のなかに失はれてゐる。

お前の咒文から私を放して呉れ、そして私の解放された情をお前に捧げるために、私に男性を返してくれ。

私は彼の女の手を把つて、私の胸に彼の女を犇と抱いてゐる

I HOLD HER HANDS AND PRESS HER TO MY BREAST.

私は彼の女の手を把つて、私の胸に彼の女を犇と抱いてゐる。

私は彼の女の可憐をもつて私の胸を充さうとする、接吻をもつて彼の女の甘い微笑を掠めやうとする、また私の眼で彼の女の暗い瞥見を飲まうとする。

あゝ、だけども、那邊にそれがあるのだらう。誰が蒼空からその紺碧を引伸ばすことができるであらうか。

私はその美を捉へやうとする。それは私の兩手のなかにたゞ肉體を殘して遁避れてゆく。

瞞されて疲れきつて私は歸つて來る。

どうすれば肉體がその花に觸ることができるのであらうか、その花はたゞ精靈だけが觸るのでもあらう。

戀人よ、私の情はお前に邂逅ふやうに
晝も夜もあこがれてゐる

LOVE, MY HEART LONGS DAY AND NIGHT FOR MEETING WITH YOU——

戀人よ、私の情はお前に邂逅ふやうに晝も夜もあこがれてゐる——宛然すべてを食ひ盡す死のやうなその邂逅を。

暴風雨のやうに私を掃蕩へよ、私の所有してゐる一切を奪へよ、私の睡をぶち壞して私の夢を强奪れよ、私の

世界から私を盗めよ。

厥の切掠に於いて、厥の靈の全くの赤裸に於いて、私たちを美のうちに單一にしてくれ。

あゝ私の空しい欲求！　爾の懷をのぞいては、何處にこの統一に對する希望があるであらうか、わが主よ。

それでは最後の唄をうたふてしまつて私達は別れやう

THEN FINISH THE LAST SONG AND TEL US LEAVE.

それでは最後の唄をうたふてしまつて私達は別れやう。夜があけたときには今夜を忘れるが宜い。誰を私は私の腕のなかへ捉へやうとするのだらうか、夢は決して俘虜にすることはできない。私の熱狂の手は私の情に空虛を緊と抱いてゐる。その空

虚(きょ)が私(わたし)の胸を傷つける。

何故燈火が消えたか

WHY DID THE LAMP GO OUT?

何故燈火が消えたか。

私が風を避けやうと思つて私の外套でそれを掩うたから、

それで燈火が消えたのだ。

何故花が萎んだか。

私が懸念な愛をもつてそれを私の情に抱きしめたから、

それで花が萎んだのだ。

何故流が干上つたか。

私が自分の用にたてやうと思つてそれを遮ぎつて堰をこしらへたから、それで流が干上つたのだ。

何故竪琴の絃が斷れたか。

私が絃の力にかなはない音調を無理に上げやうとしたから、それで竪琴の絃が斷れたのだ。

何故お前は私を侮辱する顔色をするのだ

WHY DO YOU PUT ME TO SHAME WITHA LOOK?

何故お前は私を侮辱する顔色をするのだ。
私は乞食のやうにやつてきたのではない。
たゞ過ぎゆく暫しの間私はお前の庭の端に花園の籬の外に立つてゐるばかりだ。
何故お前は私を侮辱する顔色をするのだ。

薇薔の花一輪だつてお前の花園から私は摘みとりはしない、果實一つだつて私はもぎとりはしない。
私は卑下して路傍の木蔭に憩んだのだ、其處てはどの見もしらぬ旅人もみな立ちどまるのだ。
薇薔の花一輪だつて私は摘みとりはしない。
然也、私の足は疲れた、そして驟雨が降りだした。
風が蹣跚動く竹の繁みのなかゝら叫聲をあげた。
雲は丁度敗軍から逃走するやうに大空を横ぎつて走つた。
私の足は疲れた。

私は知らない、お前が私のことを何と想つてゐたのか、
また誰をお前は戸口で待つてゐたのか。
稲妻の閃光がお前の見守つた眸を眩しくした。
どうして私は知ることができやう、お前が暗闇のなかに
佇んでゐる私を見ることが出來ることを。
私は知らない、お前が私のことを何と想つてゐたのか。
日が暮れた、そして雨が一寸の間歇んだ。
私はお前の花園の端の木蔭を、そしてこの草の上の席を

出立した。
暗くなつてきた、お前の戸を閉めよ、私は私の道を辿ら
う。
日が暮れた。

お前は籠を提げて何處へ急いでゆくのだ

WHERE DO YOU HURRY WITH YOUR BASKET

お前は籠を提げて何處へ急いでゆくのだ、市場がすんでしまつた是麼に暴れて遲くから。

彼等はみんな彼等の重荷を背負ふて家に歸つて來た　月は村の樹立のうへから覗いて居る。

渡船を喚ぶ聲の反響が、暗い水の流を越えて、鴨が眠つてゐる遠方の沼澤のはうへひゞいてゐる。

お前は籠を提げて何處へ急いでゆくのだ、市場はすんでしまつたのに。

睡眠は彼の女の指を地界の眼のうへに蔽うた。

鴉の巣は靜かになつた、そして竹の葉の呟々も沈默した。

畑から歸つて來た小作人等は庭に彼等の筵を展げた。

お前は籠を提げて何處へ急いでゆくのだ、市場はすんでしまつたのに。

あなたが往つたのは眞晝であつた

IT WAS MID-DAY WHEN YOU WENT AWAY.

あなたが往つたのは眞晝であつた。
太陽が蒼穹に灼燿てりつけて居た。
私は私の仕事をすまして獨で露臺の上に坐つてゐた、厥の時にあなたが往つた。
突發的な疾風が遠方の遠方の野面の芳香を拔けて羽搏しながら吹いて來た。

鳩は陰翳で小止みなく鵠々と啼いてゐた、そして一匹の蜜蜂は遠方の遠方の野面の音信を呟きながら私の部屋に迷ふてきた。
村は眞晝の炎熱に眠つてゐた。道路は荒寥てゐた。
突如の痙攣で木の葉の葉摺が起つてはまた斷絶えた。
私は蒼穹を凝視めて、紺碧のなかに私が知つてゐた名の文字を織りだした、厥の時村は眞晝の炎熱に眠つてゐた。

私は私の髪を結うことを忘れてゐた。
懶い微風が私の頰の上で髪を嬲つた。
流れは音もたてず青葉蔭の岸の下を走つた。
惰けた白い雲は身動きもしなかつた。
私は私の髪を結うことを忘れてゐた。

あなたが往つたのは眞晝であつた。
道路の塵埃は焦げてゐた、野面は喘いでゐた。
鳩は森然とした繁みのなかで鵠々と啼いてゐた。
私は獨りで露臺に居た、厥の時にあなたが往つた。

妾は夥多の女の群のなかの一人であつたのです

I WAS ONE AMONG MANY WOMEN

妾は夥多の女の群のなかの一人であつたのです、女どもは世帶のくだらぬ仕事のために齷齪してゐるのです。
何故あなたは妾をひとり選りだして、世間の生活の涼しい庇蔭所から妾を拐してゆくの？
表現のできぬ愛は聖淨であります。厥は秘めた情の鬱憂のなかには寶玉の如く輝きます。

不可解な白日の光のなかには厳は悼ましう暗く見えます。
あゝあなたは妾の情の隅を破つて妾の愛を大道に曳きづりだして、愛がその巣を匿してゐる陰翳の片隅を永久に壊はしてしまひました。

他の女たちは前のとほりです。
誰も女たちの奥底の存在を覗くものはありません、そして彼等自身で彼等自身の秘密を知りません。
輕快とあの女たちは微笑みます、泣きます、喋舌ります、
そして働きます。毎日毎日あの女たちはお寺へ詣りま

す、燈を點します、そして川から水を汲みます。

妾は妾の愛が、無宿ものになつて身顫ひする羞恥から脱れたいと希求ひます、だけどもあなたは顔を背けます。
そうです、あなたの道はあなたの前に廣く横つてゐます、
だけどもあなたは妾の歸り路を遮斷てゐます、そして妾を、晝と夜とを見守る眼瞼のない眼をもつてゐる現世の前に衣を剝いで裸にして置き去りにしてゐるのです。

私はお前の花を摘んでとつた、おゝ現世よ！

I PLUCKED YOUR FLOWER, O WORLD!

私はお前の花を摘んでとつた、おゝ現世よ！
私は厥れを胸に抱きしめた、そしたら荆棘が私を刺した。
日が陰影つていつて幽暗くなづたら、花が凋れてゐたのが氣に付いた、けれども私の痛苦はのこつて居た。
もつともつと澤山な花々が芳香と矜恃とを持つて訪れる

であらう、おゝ現世よ！
しかし花を聚めるための私の時刻は過ぎてしまつた、そして闇夜を透して、私は私の薔薇の花一輪も持たないで、たゞ痛苦だけが遺つてゐる。

或る朝花畑のなかに盲目の娘が

ONE MORNING IN THE FLOWER GARDEN

A BLIND GIRL

或る朝花畑のなかに盲目の娘が蓮の葉の蓋のなかに入れて花の鏈索を私に捧げやうと思つてやつて來た。

わしは厥れを私の頸に卷いた、そしたら私の眼が涙ぐんできた。

わしは彼の女を接吻して云つた、『お前は全然花と同じやうに盲目なのだ。

『お前はお前自身に甚麼にお前の贈物が綺麗だか解らないのだ』。

おゝ女よ、お前はたゞ神の手細工であるばかりでなくて

O WOMAN, YOU ARE NOT MERELY THE HANDIWORK OF GOD.

おゝ女よ、お前はたゞ神の手細工であるばかりでなくて、お前はまた男のそれである。彼等は不斷彼等のこゝろからの美をもつてお前を飾つてゐる。

詩人等は金色の幻想の絲をもつてお前のために蛛網を織つてゐる、畫家たちはお前の姿に不斷新しい不死を賦

へてゐる。

海はその眞珠を捧げ、鑛山は彼等の黄金を獻じ、夏の花園はお前を飾るために、お前に着せかけるために、一層お前を貴重にするために彼等の花をさゝげて居る。

男たちの情の欲求は、お前の青春のうへにその榮光を降り灑がせてゐる。

お前は半ば女性であつて半ば夢幻である。

生の猛進と咆哮のたゞなかで

AMIDST THE RUSH AND ROAR OF LIFE

生の猛進と咆哮のたゞなかで、おゝ佳人よ、石に彫刻せられて、お前はたつたひとりで隔てられて、無言で不動立つてゐる。

偉大な「時刻」が惚然とお前の足もとに坐つて呟いた。

『一言云つてくれ、わしに一言云つて呉れ、戀人よ。一言云つてくれ、わしの花嫁よ』。

だけどもお前の言葉は石のなかに封じこまれてある。お

不感無覺の佳人よ！

靜かに、戀人よ、離別の時を佳快くしやう

PEACE, MY HEART, LET THE TIME FOR THE PARTING BE SWEET

靜かに、戀人よ、離別の時を佳快くしやう。その時を死としないで完璧としやう。

愛を追憶と苦患のなかに融かさう、また歌のなかに融かさう。

蒼穹を翔けめぐることを、巣の上に翼をたゝむことに終

らしめよ。

お前の手の最後の感觸を夜薫る花のやうに優雅しうせよ。

凝然立つてゐてくれ、おゝ美しい終焉、ほんの一瞬の間を。そして沈默のなかにお前の最後の言葉を述べて呉れ。

私はお前に稽首いて、私の燈をさし上げてお前のためにお前のゆく路を照してゐる。

夢の薄暗い小徑のなかで私は

IN THE DUSKY PATH OF A DREAM I WENT

夢の薄暗い小徑のなかで、私は以前に私の戀人であつた
ひとを探ねに行つた。

彼の女の家は荒廢た街のはづれに立つてゐた。
夕暮方の微風に、彼の女の孔雀はその棲木に居睡りをし
て座つてゐた、そして鳩は隅の方で默りこんで居た。

彼の女は潛門の傍に燈を卸して私の前に立つた。
彼の女は私の顏を見て大きな眼をして、そして聲もせず
訊ねた、『お變りもなくつて、あなた?』
私は應へやうとしたが、私たちの言語は廢れてしまつて
忘れられてしまつた。

私はどうかして想ひださうとした、それでも私達の名前
さへも私の心に泛ばなかつた。
涙が彼の女の眼にかゞやいた。彼の女は私に向けて右の
手をあげた。私はそれを握つて默りこんだまゝ立つて

ゐた。

わたし達の燈が夕暮方の微風にゆらめいたかと思ふと滅えてしまつた。

旅人よ、汝は行かねばならぬか？

TRAVELLER, MUST YOU GO?

旅人よ、汝は行かねばならぬか？

夜は森閑と、暗がりは森の上で悶絶してゐる。

燭は露台にあかるく、花々はすつかり清新して居る、また若やいだ眼がまだ眼を醒した儘である。

汝の訣別の時刻が來たのか。

旅人よ、汝は行かねばならぬか。

私達は汝の足を、無理強ひな腕をのばして縛りはしなかつた。汝の戸は開いてゐる。汝の馬は門のところに鞍をおかれて佇んでゐる。

よしや私達が汝の通路を邪魔をしやうとしたつて、それはたゞほんの私達の唄であてこすつたばかりであつたのだ。

曾て私たちが汝をひき戻さうとしたといつても、それはたゞほんの私たちの眼であてこすつたばかりであつたのだ。

旅人よ、私たちには汝を引き留める手段はない。私達は

たゞ涙を持つてゐるばかりだ。

何といふ滅すことのできぬ焔が、汝の眼のなかに燃えてゐるのか。

何といふ静止らない熱病が、汝の血のなかを走つてゐるのか。

何といふ招喚が暗がりから汝を急きたてるのか。

何といふ戦慄させる咒文を汝は大空の星のなかに讀んだのか、それは封印せられた秘密の音信をもつて、夜が汝の沈默した打ち解けぬ情のなかにはいつてゆくのだ。

若し汝がたのしい會合を嫌がるといふのなら、もし汝が
平安を得ねばならぬのなら、疲憊た情よ、私達は燭を
消してしまつて竪琴も沈默させるであらう。
私たちは木の葉がさら〳〵戰いでゐる暗がりのなかで靜
かに坐らう、そして倦怠い月が汝の窓に蒼白い光線を
降り灑がせるであらう。
おゝ旅人よ、何といふ不眠の妖精が眞夜中の情から汝に
觸つたのだらう？

私は私の一日を道路の焦げつく熱い埃塵のなかで過した

I SPENT MY DAY ON THE SCORCHING HOT DUST OF THE ROAD

私は私の一日を道路の焦げつく熱い塵埃のなかで過した。
いま、夕暮方の冷涼のなかに私は旅宿の戸を叩いてゐる。
旅宿は荒れて廢址にあるのだ。
恐ろしい容貌のアシャトの木が、その飢えた握扼の根を
壁の欠びした裂目を通して展げてゐる。

大分日數を經た以前に旅人等がその足を濯ぎに此處に來た。

彼等は夕月の幽かな光のなかで彼等の莚を庭に展げて座つて、異國のことを物語つた。

彼等は朝心神爽快して眼を覺した、厥の時小鳥は彼等を慰めた、また友誼な花が路傍から彼等にお辭儀をした。

だけども私が此處に來た時は、點火された燈がひとつも私を迎へなかつた。

幾つも幾つもたくさんな遺却の燈によつて殘つた油烟の黑い汚斑が、宛然盲目の眼のやうに壁から熟と視つめてゐる。

螢が干からびた池の傍の草叢のなかで灯をともしてゐる、そして竹の青葉は草だらけの道の上にその陰影を投げてゐる。

私は私の一日の終りに誰一人にも客として迎へられることがない。

長い夜が私の前にある、そして私は因憊てゐる。

またお前は招んでゐるのか

IS THAT YOUR CALL AGAIN?

またお前は招んでゐるのか。
夕暮が迫つた。倦怠が私の身邊に、宛然切願む戀人の腕
のやうに纏うてゐる。
お前は私を招んでゐるのか。

私はお前に私の晝を皆捧げたのに、殘忍な情婦よ、お前
はまた私の夜も奪はねばならぬのか。

すべて物には終焉がある、そして暗黑の獨居はその意味
である。
お前の聲はそれを邪魔せねばならぬのか、また私をなや
まさねばならぬのか。

夕暮が、お前の門口では唾の音樂をちつとも奏でないの
か。
沈默の翼の星たちが、お前の慘酷の塔の眞上の空にはち
つとも登らないのか。
花がお前の花園では、優しい死の塵埃の上にちつとも落

ちないのか。

お前は私を喚ばねばならぬか、浮躁したお前よ。
それなら愛の悲しい眸を、空しくじつと見守つたり、ま
た泣いたりするが宜い。
そして燈を淋しい家にともせよ。
渡舟に、家に歸る疲れた小作人たちを乘せて渡らせよ。
私は私の夢をあとにして、お前の喚ぶはうへ急いでゐる。

放浪して居る狂人が試金石を索してゐた

A WANDERING MADMAN WAS SEEKING THE TOUCHSTONE

放浪して居る狂人が試金石を索してゐた、赤ちやけた塵
埃をかぶつたむしやくしやの長い髪をして、軀は陰影
のやうに痩せ、彼の堅と緘いだ唇は彼のこゝろの鎖さ
れた戸のやうに、又彼の燃えた眼は友を探ねる土螢の
灯のやうてあつた。

彼の前には無窮の大洋が唸つてゐた。
饒舌の波浪が小止みもなく隱れた寶のことを物語つて、
彼等の云ふ意味のわからない無智者を嘲つてゐた。
恐らく彼は今いかなる希望一つも殘してゐなかつたが、
それでも彼は休まうとはしなかつた、何故かといふに
その探求が彼の生命となつてゐたのだ——
宛も大洋が永刼にその腕を大空に達し難いためにさし伸
ばす如くである——
宛も星辰が環をなして進んでゐるが、なほ決して達する

ことのできぬ決勝點を探してゐる如くである——
正にその如く淋しい濱邊に狂人が塵埃にまみれた赤ちや
けた長い髪をして、試金石を索すために靜かに徘徊い
てゐた。

ある日村の童子がやつて來て尋ねた、『わしに教へてくれ
那邊て汝は腰のまわりのこの金の鏈索を拾ふたのだ』。
狂人は跳びあがつた——曾て鐵てあつた鎖索が眞に黃金
てあつた。厭れは夢てはなかつた。けれども彼は何時
變つたのか知らなかつた。

彼は荒く額を打つた――那邊で、おゝ那邊で、無意識に
彼はそれを成就させたのか。
介殼を拾うて鎖索をこすり、變化したかどうかを見るこ
ともせず拋棄るのが一つの習慣となつてゐた。このや
うにして狂人は試金石を見付けだしたりまた喪くした
りした。
太陽は西に低う沈んでゐた、而して蒼穹は黄金であつた。
狂人はまた足歩だして喪ふた寶をまた新たに探した、彼
の力は衰へ彼の軀は腰がかゞみ、また彼の情は塵埃の
なかにちようど根拔かれた木の様であつた。

縱令夕暮が徐々歩いて來て

THOUGH THE EVENING COMES WITH SLOW STEPS

縱令夕暮が徐々歩いて來て、すべての歌を歌めいと信號
しても、
縱令お前の仲間が休息しに歸り、お前が疲れてゐても、
縱令恐怖が暗がりに沈思んで、蒼穹の貌が面紗に蔽はれ
ても、
それでも、小鳥、おゝ私の小鳥よ、私に耳を傾けてくれ

お前の翅をたゝむな。

それは森の青葉の鬱憂ではない、それは烏羽玉色の蛇のやうにうねりくねりする海である。

それはさき匂ふ素馨花の舞踏ではない、それは閃く泡である。

あゝ那邊に日光にかゞやく緑の濱邊があるか、那邊に前の巣があるか。

小鳥、おゝ私の小鳥よ、私に耳を傾けてくれお前の翅をたゝむな。

寥しい夜がお前の道に沿うて横はつてゐる、曙は陰影になつた丘の後に睡つてゐる。

星たちは呼吸を凝らして時間を數へてゐる、衰弱した月が深い夜のなかに泳いでゐる。

小鳥、おゝ私の小鳥よ、私に耳を傾けてくれ、お前の翅をたゝむな。

お前には其處に希望はすこしもない、恐怖もすこしもない。

其處に言葉もなければ、私語もなければ、叫び聲もない。
其處には家もなければ、休息の寢床もない。
其處にはたゞお前自身の一對の翅と路のない大空がある
ばかりである。
小鳥、おゝ私の小鳥よ、私に耳を傾けてくれ、お前の翅
をたゝむな。

誰一人も永劫には生きない、兄弟よ

NONE LIVES FOR EVER BROTHER.

誰一人も永劫には生きない、兄弟よ、そして何一つも長
くは續かない、それを心に留めてたのしめよ。
私たちの生命は一つの古い重荷ではない、私達の道は一
つの長い旅ではない。
ひとりの詩人が一つの時代の歌を歌はねばならぬことは
ない。
花は凋萎びて滅びる、しかし花を着けた男が永久に花の

ために哀悼まねばならぬことはない。

兄弟よ、それを心に留めてたのしめよ。

完全な音樂に織りこむためには、充分な斷音符を作らねばならぬ。

生命は厥の落日に向つて金色の影のなかに溺死させられるために凋落してゐる。

愛は憂愁を飲んで、涙の天界に產み出されるために、その遊戯から呼び返されねばならぬ。

兄弟よ、それを心に留めてたのしめよ。

私達は大急ぎで私達の花を摘んでゐる、それが吹きすさぶ風によつて掠められないやうに。

若し私達が逡巡してゐたら消えてしまふだらうといふことが、接吻を捉まへやうとして私達の血を躍らしめ、また私達の眼を輝かしめてゐる。

私達の生命は切實である。私達の渇愛は鋭敏である、何故なれば時が訣別の鐘を打ち鳴らしてゐるから。

兄弟よ、それを心に留めてたのしめよ。

私達にとつては一物を掴んだり、或はそれを壊したり、或はそれを塵埃のなかへ抛棄てたりする時ではない。

時間は急速に、その裾のなかにその夢幻を匿しながら輕く跳んで行く。

私達の生命は短い。生命はほんの二三日を愛のために允すばかりだ。

生命が事業と勞苦のためだといふのなら、それは無限に長くなければなるまい。

兄弟よ、それを心に留めてたのしめよ。

美は私達に佳快くある、それは彼の女が私達の生命をもつて同じ速さの調子で舞踏するからである。

智慧は私達に貴重である、それは私達がそれを完成する時を決して持たないからである。永遠の天界に於いてすべては成就せられ完結せられるのである。

だけども幻妄の地界の花は、死によつて永遠に清新に保たれるのである。

兄弟よ、それを心に留めてたのしめよ。

わしは金色の牡鹿を獵りたてゝゐる

I HUNT FOR THE GOLDEN STAG.

わしは金色の牡鹿を獵りたてゝゐる。

君等は笑ふかも知れないが、友よ、私は私を逃避れてゐる幻影を趁うてゐるのだ。

私は丘や谷間を越えて走つてゐる、私は名も知れぬ國々を放浪してゐる、何故かといふとわしは金色の牡鹿を獵りたてゝゐるからだ。

君等は市場に來て買ふて、君等の家に品物を擔いで歸つ

て行く。しかし家なしの風伯の咒文が私を蠱はして、私は時も場所もわからなくなる。

私はわしのこゝろのなかに心配がない。私の一切の所有物が私の背後に遠くとり殘されてゐる。

私は丘や谷間を越えて走つてゐる、私は名も知れぬ國々を放浪してゐる——何故かといふと私は金色の牡鹿を獵りたてゝゐるからだ。

わしは子供の時の或る日のことを想ひうかべる

I REMEMBER A DAY IN MY CHILD HOOD

わしは子供の時の或る日のことを想ひうかべる、わしが紙の舟を溝に流したのを。

それは七月の濕めつぽい日であつた。私はたつた獨りてわしの遊戯に幸福であつた。

私は紙の舟を溝に流した。

急遽に暴風雨の雲が濃くなつて、風は疾風になり、雨が瀧のやうに降りだした。

泥水の小流が、突き進んてながれを漲らせ、わしの舟を沈めてしまつた。

暴風雨がわしの幸福を惑亂するために襲ふたことを、わしは心のなかに非常に悲しく思つた。

その惡意はすべてわしに仇をするものであつた。

今日も七月の曇つた天氣が長びいてゐる、そして私は生涯に試みたすべてこれらの遊戯の失敗者であつたのだ。

急遽に私は溝に沈んだ紙の舟を想ひうかべた時に、わしは宿命が私を翻弄する夥多の狡計に對して私の宿命を、非難してゐる。

日はまだ暮れない、市はまだすまない

THE DAY IS NOT YET DONE. THE FAIR IS NOT OVER,

日はまだ暮れない、市はまだすまない、川岸の上の市が。

私は私の時が空費されはしまいかまた私の最後の小錢がなくなりはしまいかと心配をした。

だけどもさうではなかつた、兄弟よ、私はまだ若干を殘してゐる。

賣り買ひが終つた。
双方の一切の支拂が集められた、そして私が家に歸る時刻である。
だがしかし門番よ、汝は汝の市賣り稅をくれいといふのか。
心配することはない。私はまだ若干を殘してゐる。私の宿命はすべてのものに私を欺いてはゐない。
風のなかの子守唄が嵐にならうとしてゐる、そして西の方に低う垂れた雲が少しも吉報を兆してゐない。

沈默した水が風を待つてゐる。
私は夜が私を追付く前に河を渡らうと急いでゐる。
おゝ渡守よ、お前はおまへの渡賃をもとめる。
然也、兄弟よ、私はまだ若干を殘してゐる、私の宿命は
すべてのものに私を欺いてはゐない。
路傍の樹の下に乞食が坐つてゐる、あゝ彼は憶病な望で
私の顏を見詰めてゐる。
彼は私がその日の利益で有福だと思つて居る。
然也、兄弟よ、私はまだ若干を殘してゐる、私の宿命は

すべてのものに私を欺いてはゐない。

夜は次第に暗くなる道はさびれる。螢が青葉がくれにかゞやいて居る。

竊りと秘足で私のあとを追ふのは誰だ。

あゝわかつた、私の所得をすつかり盗まうといふのがお前の望だな。私はお前を失望させはしない。

何故かといふに私はまだ若干を殘してゐる。私の宿命はすべてのものに私を欺いてはゐない。

眞夜中に私は家に着いた、私の兩手は空虛である。

お前は睡眠もせずに心配さうな眼つきをして戸口に待つてゐる。

畏懼く小鳥のやうに、お前が熱烈の愛をもつて私の胸に飛びかゝつてくる。

をや、神よ、まだ澤山殘つてゐる。私の宿命はすべてのものに私を欺いてはゐない。

苛酷い勞苦の幾日かを經て私は寺を建立した

WITH DAYS OF HARD TRAVAIL I RAISED A TEMPLE.

苛酷い勞苦の幾日かを經て私は寺を建立した。厥れは扉もなければ窓もない、その壁は巨大な石で厚く建てられてある。

私は他のもの一切を忘れた、私は全く世間を遁れた、そして私が祭壇に安置した神像を私は無我の祈念に凝視

めた。

寺の内は不斷夜であつた、そして芳香油の燈盞に照されて居た。

燻物の小止みもない烟はそのきついかほりの渦卷のなかに私の情を捲きこんでゐた。

眠られもせず私は壁の上に有頂天の昏醉で空想的な姿を彫りつけた——翅をもつた馬を、人の面貌をした花を、また四肢が蛇のやうな女を。

小鳥の歌や木の葉の葉摺れや繁しい村の唸り聲を通すやうな路は何處にもなかつた。

その穹窿に谺を返す音だけが私を蠱はす咒法であつた。
私の心は過敏になつたが矢張り消えかけの燈のやうであつた、私の感覺は狂歡のなかに悶絶した。
私は知らない、電が寺をぶち壞してから、また苦患が私のこゝろを突き刺してから什うして時刻が經つたのか。
燈盞は蒼白めて含羞がちであつた、壁の上の彫刻は鎖索に繋いだ夢幻のやうに、彼等は彼等自身を消したいやうな樣子でひかりのなかに茫然視つめてゐた。
私は祭壇の上の神像を見詰めた、私はそれが神の活きた

感觸をもつて生きて微笑んでゐるのが氣づいた。私が幽閉められてゐた夜がその翅を擴げて飛び去つてしまつた。

無限の富は汝のものではない

INFINITE WEALTH IS NOT YOURS,

無限の富は汝のものではない、わが忍耐強いうす汚い母の塵土よ。

汝は汝の小兒の口を充さうと思つても、なかなか食物が容易く得られない。

汝が私たちに與へる歡喜の賜物は決して完全てはない。

汝が汝の小兒のためにつくる玩具はすぐ壞れてしまふ。

汝は全く私たちの飢渴の欲望を醫することはできないのだ。しかしそのために汝を愚弄はしない。

汝の微笑は苦患をもつて陰影を投げられてゐるが、厭れが私の眼には優しい。

汝の愛には滿足がないが、それが私の情にはなつかしい。

汝の胸から汝は私たちを、不死ではなくて生命をもつて養ふてゐるが、それが汝の眸が絶えず覺醒である理由である。

永年の間汝は繪具と詩歌で製作をしてゐるが、しかし汝の天界は建設できない。たゞその悲しい暗示ばかりてある。

汝の美の創造の上に涙の露がかゝつてゐる。
私は私の歌を汝の默つたこゝろのなかに注がしめやう。
また私の愛を汝の愛のなかに注がしめやう。

私は勞働をもつて汝を禮拜するであらう。
私は汝の優しい面貌を見つめてゐる、そして私は汝の憫
恨しい塵土を愛してゐる、母である地界よ。

世界の會堂では

IN THE WORLD,S AUDIENCE HALL

世界の會堂では、草の一葉が、日光と眞夜中の星と同じ
絨氈の上に坐つてゐる。
そのやうに私の歌はその世界の心のなかの席を雲や森の
音樂に讓つてゐる。
けれども、爾富める人よ、爾の富は、太陽のよろこばし
い黃金の單純な偉大のなかにも、また冥想する月の醉
心地の光のなかにもその席がない。

一切を抱擁する大空の天福はその上には降り灑がない。
そして死が現はれたときに、その富は蒼白めて枯れて塵
埃のなかに微塵になる。

眞夜中に似而非隱遁者が告げた

AT MIDNIGT THE WOULD-BE ASCETIC ANNOUNCED.

眞夜中に似而非隱遁者が告げた。
『今こそわしの家を捨てゝ神を探ねるべき時である、あゝ
誰が是麼に長く私を此處で妄想のなかに引きとめてゐ
るのだ。』
神はさゝやいた、『俺だ』けれどもその男の耳は塞がれて
ゐた。

彼の女の胸に眠つた嬰兒を抱いて彼の妻が寢床の片一方に平和に睡つてゐた。

その男が云つた、『是麼に長く私を呆然にしてゐたのは誰だ。』

聲が再び言つた。『彼等は神である、』けれども彼はそれを聞かなかつた。

嬰兒は夢に魘されて泣きだした、その母親にぴつたり抱きついて乳房をくはへながら。

神は命じた、『止せ白癡め、爾の家を棄てるな。』

神は吐息をついて歎いた、『何故俺の僕は俺を探ねるのに

却て俺を見捨てゝさ迷ひあるくのだらう。』

市が寺の門前で開かれてゐた

THE FAIR WAS ON BEFORE THE TEMPLE

市が寺の門前で開かれてゐた。凌晨から雨が降つてゐた、そして日が暮れてきた。

群衆のあらゆる歡喜よりも一層輝いたのは、櫻欄の葉の笛を一錢で買ふた少女のかゞやいた微笑であつた。

その笛の感慄い喜悅があらゆる笑聲や喧騷を越えて漂うた。

人々の涯のない群がやつて來て相互に押し合ふた。道は

泥泥で、川は水が溢れ、野は小止みもない雨で濡れびしよりになつてゐた。

群衆のあらゆる困惱よりも一層大きいのは小さな小兒の困惱であつた——彼は彩色した杖を買ふのに一錢持つて居なかつた。

彼の店頭を凝視める欲しさうな眼つきが、人々のこの集合全體を大變愍然にした。

西方の國から來た職工とその妻が

THE WORKMAN AND HIS WIFE FROM THE WEST COUNTRY

西方の國から來た職工とその妻が、大窯にする煉瓦をつくるのに忙しう土を堀つてゐる。

彼等の小娘は川岸の揚場にゆく、其處で小娘は壺や皿を洗つたり磨いたりするに涯限がない。

小娘の弟は剃つた坊主頭をして日に焦けた赤裸の四肢を泥まみれにして、姉のあとに從ひ高い河岸の上で我慢

づよく姉の命令を待つてゐる。

彼の女は頭に載せた一杯の水甕をもつて家に歸つてくる、キラキラする眞鍮の壺は左の手に、また右の手には小兒を抱いて——彼の女はその母親の小さな召使をつとめてゐるので、家事の心配の重みでまゝせてゐる。

或る日私はこの赤裸の小兒が兩足を投げだして坐つてゐるのを見た。

流のなかでは小兒の姉が坐つて酒壺をくるくる轉しながら掌に一杯の土を以て磨いてゐた。

その傍に柔軟い毛の仔羊が佇んで岸邊の畔を凝視めてゐ

た。

仔羊は小兒が坐つてゐる場所にやつて來て突然高く咩いた、小兒は驚起つて泣きだした。

小兒の姉は壺を洗ふのを歇めて馳せつけた。

彼の女は弟を一方の腕に擁へ一方に仔羊を抱きあげて、獸の子と人間の子とを愛情の單一の羈絆のなかに結んで兩者に彼の女の熱愛を配けて與つた。

五月であつた

IT WAS IN MAY

五月であつた。蒸し暑い正午が限際もなく長びくやうに思はれた。乾びきつた大地は炎熱に渇いて喘咽いでゐた。

厥の折に妾は川端から喚んでゐる聲をきいた、『おいで、私の愛人！』

妾は本を閉ぢて外を見やうと窓を開けた。

妾は大きな水牛を見た、泥まみれになつた柔毛の水牛が

平和な忍耐強い眼をして流の際に立つてゐた。そして一人の青年が流のなかに膝までではいつて、水牛を水浴みに呼んでゐたのだ。

あたしはをかしくて笑つた、そしてあたしの情のなかに佳快い感觸がながれた。

私は屢々驚異んだ、何處に

I OFTEN WONDER WHERE LIE HIDDEN

私は屢々は驚異んだ、何處に、人間とそして情が言語を解しない獣との間の認識の限界が、隱れて存在するのか。

また如何なる創世の遠い遠い朝の第一の樂園を貫いて人と獣との情が相互に融け合ふ單一の道が通じたのか。

是等彼等の不斷の歩行の足痕がすつかり抹殺られては居ない、假令彼等の親密が久しい間忘れられて居るとは

いへ。

それでも依然突如に或る無言の音樂のうちに幽微な追憶が眼を覺して、獸は人間の顏をやさしい信頼をもつてじろじろ見つめる、そして人間はよろこばしい情愛をかける眼をもつて見下して居る。

厥れは宛然二人の友達が假面を被つて出會し、相互に扮裝を透して漠然と感付いてゐるやうである。

お前の眼の一瞥でお前は

WITH A GLANCE OF YOUR EYE YOU COULD

お前の眼の一瞥でお前は掠め奪ることができる、詩人達の竪琴から鳴り響く詩歌の富のすべて一切を、美しい女よ。

けれども彼等の讃美にお前は耳を傾けはしない、何故かといふにわしがお前を讃め頌へに來るから。

お前は現世に於いて一番傲慢な頭をお前の足もとに跪かしめることができる。

けれどもその者はお前の愛するひとである、名譽も何も
ないもので、それをお前が崇拜しやうと選んだのだ、
それだから私はお前を崇拜する。
お前の兩腕の完璧はそれが觸れると王者の如く灼燿に榮
光を添えるであらう。
けれどもお前はその兩腕を塵埃を掃き除けるために使ふ、
またお前の粗末な部屋を拭くため使ふ、それだからわ
しは畏憚に充ちてゐるのだ。

何故汝は其麼にかすかに私の耳に私語くのだ

WHY DO YOU WHISPER SO FAINTLY IN MY EARS

何故私は其麼にかすかに私の耳に私語くのだ、おゝ「死」よ、
わが「死」よ。
夕暮方花々が綻ぶときに、また家畜がその檻小舍に歸る
ときに、私は秘び足で私の側にやつてきて私には理會
できない言葉を語つてゐる。
これが懶い私語の阿片酒と冷い接吻とをもつて汝が私を

口説き落さねばならぬ呪法なのか、おゝ「死」よ、わが「死」よ。

其處には私達の婚禮のために盛大な儀式はあげられないのであらうか。

汝は汝の赤ちやけた縮んだ捲髮を花環をもつて結ばないのであらうか。

其處には汝の旌を汝の前に押し立てゝ來るものは一人も居ないのか、またその晩を汝の眞紅な火把の明りて照しはしないのか、おゝ「死」よ、わが「死」よ。

汝の鳴りわたる放螺貝をもつておいで、不眠の夜のうちにおいで。

私に緋色の外套を着せて呉れ、私の手を握つて連れていつてくれ。

汝の馬車を短氣に嘶く汝の馬をつけて私の戸口に用意して置いてくれ。

汝の面紗は外して私の顏を袷恃げに見つめてくれ、おゝ「死」よ、わが「死」よ。

私たちは今夜死の遊戯をしてゐる

WE ARE TO PLAY THE GAME OF DEATH TO-NIGHT,

私たちは今夜死の遊戯をしてゐる、わたしの花娶と私とで。

夜は眞闇である、雲は空に氣紛れてある、そして浪は海で氣が狂うてゐる。

私たちは夢幻の寢床をあとにして戸を擲き開けて外へ出た、わたしの花娶と私とが。

私たちは鞦韆の上に座つてゐる、嵐の風が後から荒く私たちを押し出してゐる。

私の花娶は恐怖と歡喜とで跳びあがる、彼の女は私の胸に身顫ひをして纏ひつく。

長い間私は彼の女にやさしく盡してやつた。

私は彼の女のために花の寢床を作つてやつた、そして彼の女の眼から荒々しい黎明を避けるやうに窓を鎖してやつた。

私はやさしく彼の脣を接吻し、また彼女が疲倦のなかに半ば悶絶するまで彼の女の耳に私語いた。

彼の女は朧朧とした佳快の限際のない霧氣のなかに我を忘れた。

彼の女は私が觸つても答へなかつた、私の唄は、彼の女を興奮させるのに失敗した。

今夜正に、私たちに荒野から暴風雨の招喚が到着してゐる。

わたしの花娶は身顫をして立ち上つた、彼の女は私の手に縋つて外へ出た。

彼の女の髪は風にほつれた、彼の女の面紗はひらひら飜る、彼の女の花冠は胸のうへにさらさら鳴る。

死の一突は彼の女を生命のなかに搖振つた。

私たちは互に顔に顔をひきよせ、情に情をひきよせてゐる、わたしの花娶と私とが。

彼の女は丘邊に棲んでゐた

SHE DWELT ON THE HILLSIDE

彼の女は丘邊に棲んでゐた、玉蜀黍畑の端の傍の、泉が老樹の莊重しい陰影を通ずる笑ひ聲の小流れとなつて走つてゐる畔に。

女どもが其處に來て水甕を一杯にした。旅人たちは其處によく座つて息んで話をしてゐた。彼の女は毎日毎日泡だち迸る流の調子につれて働いたりまた夢をみたりした。

ある夕べ、異郷の旅人が、雲に隱れた峯から降りて來た。彼の長い髪は眠つた蛇のやうに縺れてゐた。私たちは不思議におもつて訊ねた、『全體お前は何者だ。』彼は答へなかつたが、饒舌の流の傍に座つて、彼の女が住んでゐる草舍を見つめてゐた。私達の情は恐怖に震へた、そして日が暮れたので私達は家に戻つた。

翌る朝女どもがデヲダル樹の繁つた泉の畔に水を汲みに來た時に、彼等は、彼の女の草舍の窓が開いてゐたけれども、彼の女の聲がしないのを氣付いた。那邊へ彼の女の笑顔はいつたのか。空虛の甕が床の上にころが

り、彼の女の燈は隅で自身に消えてしまつてゐた。誰も彼の女が夜のあけぬ間に何處へ逃げたのか知らなかつた。――そして異郷の旅人は去つて居た。

五月となつて太陽が強くかゞやき、雪が解けてしまつた、そして私達は泉の畔に坐はつて流涕した。私達は私達の心のうちに怪しんだ、『彼の女が行つた國には泉があるのだらうか。また彼の女はこの頃のやうな暑い渇く日には何處で水甕を充すことができるのてあらうか。』そして私達は相互に不安げに訊ねた、『私達が住んでゐるこの丘の彼方のはうに國があるだらうか。』

ある夏の夜であつた、微風は南から吹いて居た、そして私は燈がともされずまだそのまゝ置いてある彼の女の無人の部屋に座つた。厥の時突然に私の眼の前から帳がひきとられたやうに丘が消えてしまつた。『あゝやつて來るのは彼の女だ、偉在であるか、私の愛する子よ、幸福なのか。併しこの廣い大空の下でお前は何處に身を寄せることができるのだ。そしてあゝお前の渇を醫するための泉が此處にはないのだ。』

彼の女は答へた、『この大空は同じ大空です、ただ墻をした丘から自由だといふだけが異ふのです――この谿川

は同じ流で、やがて河になるのです――やはり同じ地界が平原となつて擴がつてゐるのです。』私は歎息した、『萬物は此處にあるが、たゞ私達がゐないばかりだ。』彼の女は悲しげに微笑んで云つた。『あなたはあたしの情のなかにあります。』私は夢から醒めて、起きあがつて、夜の流のせゝらぎとデヲダルの葉摺れの音に耳を澄した。

綠と黃色の稻の野面を越えて

OVER THE GREEN AND YELLOW RICE-FIELDS,

綠と黃色の稻の野面を越えて、急速に獵りたてる太陽に追はれてゐる秋雲の影が匐ふ。

蜜蜂は彼等の蜜を集めることを忘れる、日光に醉ひどれになつて彼等は他愛もなく翩搖きまはりブンブン唸つてゐる。

川の中の小島ではほんの無意味に家鳴が雀躍してがやがやわめいてゐる。

誰も家に歸してはならぬ、兄弟よ、今朝、誰も働きに行かしてはならぬ。

私達に嵐によつて青空を捕捉へさせてくれ、また私たちが走るまゝに空間を掠めさせて吳れ。

笑ひ聲が洪水の水泡のやうに空中に漂ふてゐる。

兄弟よ、私達に私達の朝を他愛もない唄で浪費ひさせてくれ。

お前は誰だ、讀者よ、私の詩を

WHO ARE YOU, READER, READING MY POEMS,

お前は誰だ、讀者よ、私の詩を百年經つてから讀んでゐるお前は誰だ。

私はお前に、この春の富祐から一莖だけの花を與へることができない、また彼方の雲から一條だけの黃金を與へることができない。

お前の窓をあけて遠方を眺めよ。

お前の滿開の花園から、百年前の消滅した花の馥郁たる

かほりの追憶を蒐めよ。
お前の情の歡喜のうちにお前は、或る春の朝百年の歳月
を貫いてその嬉しい聲を送りながら歌はれたその生々
した喜悅を感ずるかもしれない。

園丁終

大正四年十月十五日印刷
大正四年十月二十日發行

抒情詩集
丁園
定價金九拾錢

譯者　增野三良
發行者　東京市日本橋區檜物町九番地　西村寅次郎
印刷者　東京市京橋區本湊町三番地　城田新治郎

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店
電話本局一八七一番・振替東京五六一四番

タアゴルの三大詩集完成

■裝幀は各詩集の生命を表現せる無二の藝術的美本■

■増野三良氏苦心の譯■

■若きタアゴルの俤を偲び得る唯一の抒情詩集■

印度新抒情詩集 **園丁** 新刊

眞紅表紙金象嵌 挿畫五葉 定價金九十錢 送費八錢

詩聖が二十五位の頃から三十五六までの間に悲愁と孤獨に深く滲徹し苦悶した間の青年時代の愛と生の抒情詩集である。この一卷に〔ギタンヂヤリ〕に收められた信仰的詩篇よりずつと以前の作であつて、この詩聖の人間的な苦悶の最も力强く表はれた唯一の戀愛詩集である。このイエーツに獻ぜられた詩集園丁のなかの含羞がちの處女は水甕に水を汲むことも忘れて全體何を疑視してゐるのであらう？

■杜撰なる飜譯と安直なる概概的紹介とに反抗し忠實なる全譯を以て詩聖の哲學と恍惚を傳達す■

野口米次郎氏、灰野庄平氏序、富本憲吉氏裝

幼兒詩集 **新月** 新刊

印度現代神秘讃家挿畫八葉 四六判二百頁函入裝幀頗る華麗 定價金壹圓 送費八錢

歌の祭贄 **ギタンヂヤリ** 再版

タアゴル像二葉 夜と曙を象徵したる裝幀 定價金九十錢 送費八錢